カノ缺ケタル原告又ハ被告ニ其後ノ演述ヲ禁シ且更ニ新期日ヲ定メテ訴訟代人ヲシテ代理セシムヘキヿヲ命スルヿヲ得若シ原告又ハ被告カ命ニ從ハサル片ハ申立ニ因リ其任意ニ退キタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フヿヲ得

辯護士ニアラサル訴訟代人ニシテ其任ニ適セサルヿノ顯ハルヽ者又ハ他人ノ為メニ訴訟ヲ為スヲ業トスル者ハ之ヲ退クルヿヲ得之ヲ退ケタル場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且其期日ニ呼出ス際斥退ノ決定書ヲ原告又ハ被告ニ送達スルヿヲ要ス

新呼出状ニハ同時ニ辯護士ニアラサル代人ハ最早許サヽル旨ヲ原告又ハ被告ニ通知スルヿヲ得此條ノ規定ニ從ヒ為シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヿヲ得ス

第二百五十一條　原告カ其訴ヘタル請求權ヲ抛棄シ又ハ被告カ裁判所ニ於テ又ハ書面ヲ以テ其請求ヲ認諾スル片ハ爭訟ハ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス終結ス然レ𪜈相手方ハ抛棄ノ場合ニ於テハ即時ノ却下ヲ又認諾ノ場合ニ於テハ即時ノ判決ヲ申立ツルヿヲ得

第二百五十二條　口頭辯論ニ付テハ裁判所書記調書ヲ作ルヿヲ要ス

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲クルヿヲ要ス

第一　辯論ノ場所、年、月、日

第二　判事、裁判所書記及ヒ立會フタル撿事局代表人ノ氏名

第三　爭訟物ノ表示及ヒ原告被告ノ氏名

第四　出頭シタル原告被告、法律上代人、辯護士、訴訟代人及ヒ立會フタル通事ノ氏名若シ原告又ハ被告闕席シタル片ハ其明記

第五　公ニ辯論ヲ為シ又ハ公開ヲ禁シタルヿ

第二百五十三條　辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載スルヿヲ要ス調書ニ記載シテ明確ニスヘキ諸件ハ左ノ如シ

第一　書面ニ掲ケサル申立及ヒ其他裁判ノ為メ重要ナル申述若シ申立及ヒ申述カ書面ニ掲ケラレタル片ハ其旨ヲ附記スルノミヲ以テ足ル

第二　自認、認諾、抛棄及ヒ和解

第三　證人及ヒ鑑定人ノ供述ノ全部

第四　撿證及ヒ其他採證ノ結果

第五　調書ニ添附セラレサル裁判（判決、決定及ヒ命令）

第六　裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附セラレ且調書ニ附録トシテ表示セラレタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第二百五十四條　前條第一項第一號乃至第四號ニ於テ掲ケタル調書ノ部分ハ訟廷ニ於テ

之ヲ當事者ニ讀聞カセ又ハ閲覧ノ為メ之ヲ
當事者ニ提示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ為シタルヿ及ヒ承諾
アリタルヿ又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記
スルヿヲ要ス

第二百五十五條　調書ノ檢認ハ裁判長及ヒ裁
判所書記之ヲ為ス

第二百五十六條　受命判事又ハ受託判事カ訟
廷ノ内外ニ於テ為ス審問ニモ亦裁判所書
記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問ニ付テノ調書ニ之
ヲ準用ス然レ圧調書ニハ出頭シタル當事者
カ承諾ノ證徴トシテ署名捺印スルヿヲ要ス

若シ當事者署名シ又ハ捺印スルヿ能ハサル片
ハ其旨ヲ調書ニ附記スルヿヲ要ス

第二百五十七條　規定シタル方式ヲ遵守シタ
ルヤ否ハ調書ニ依リテノミ之ヲ證スルヿヲ
得

其方式ニ關スル調書ノ旨趣ニ對シテハ偽造
ノ證明ノミヲ為スヿヲ許ス

民事訴訟法草案第八回附録

第百五十二條　期日又ハ期間ヲ怠リタル原告又ハ被告ハ其爲スヘキ訴訟行爲ヲ爲スノ權ヲ失フ但此法律カ其追完ヲ許ス片ハ此限ニ在ラス

懈怠ノ法律上ノ結果ハ當然起發ス但此法律カ失權ヲ爲サシムルヿニ付テノ相手方ノ申立ヲ要スル片ハ此限ニ在ラス

間ハ原告被告ノ合意ニ因リ之ヲ伸フルヿヲ

獨逸民事訴訟法（自第二百十一條 至第二百二十九條）

第二百十一條　天災又ハ其他避クヘカラサル事変ニ因リ不可変期間ヲ遵守スルヿヲ妨ケラレタル原告又ハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許與ス

原告又ハ被告カ故障ノ期間ヲ懈怠シタルトキハ其過怠ニアラスシテ懈怠判決書ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許與ス

第二百十二條　原狀回復ハ二週日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルヿヲ要ス

期間ハ障碍ノ止ミタル日ヲ以テ始マリ其期間ハ原告被告ノ合意ニ因リ之ヲ伸フルヿヲ

得ス

懈怠シタル不可變期間ノ終ヨリ起算シテ一个年ノ滿了ノ後ハ最早原狀回復ヲ申立ツルヿヲ得ス

第二百十三條　不可變期間ノ懈怠ニ對スル原狀回復ハ遲クモ期間ノ滿了スル三日前ニ其遵守ノ爲メ送達スヘキ書類ヲ送達ノ爲メ執達吏ニ交付シ又ハ裁判所書記ヲ經テ送達スルヿヲ許シタル場合ニ限リ送達ノ爲メ裁判所書記ニ交付シタルトキニモ亦其申立ニ因リ原告被告ニ之ヲ許與ス

原狀回復ハ懈怠シタル不可變期間ノ滿了後一个月ノ期間内ニ之ヲ申立ツルヿヲ要ス

第二百十四條　原狀回復ハ書面ノ送達ニ因リ之ヲ申立ツ其書面ニハ左ノ諸件ヲ掲クルヿヲ要ス

第一　原狀回復ノ理由タル事實

第二　原狀回復ノ疏明ノ方法

第三　懈怠シタル訴訟行爲ノ追完又ハ此行爲ヲ既ニ追完シタルトキハ其旨

即時ノ抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ書面ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス其書面差出ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ發シタル裁判所ニモ又抗告裁判所ニモ之ヲ爲スヿヲ得

第二百十三條ノ場合ニ於テハ原狀回復ハ懈

怠シタル不可變期間ノ滿了後一个月ノ期間内ニ期日ノ爲メニスル呼出狀ヲ送達シタルトキハ口頭辯論ノ爲メ定メタル期日ニ於テ豫メ書面ヲ送達スルヿ無クシテ亦之ヲ申立ツルヿヲ得

第二百十五條　原狀回復ノ申立ニ付テハ追完シタル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲スノ權アル裁判所之ヲ裁判ス

第二百十六條　原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完シタル訴訟行爲ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レ𪜈裁判所ハ訴訟手續ヲ先ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ制限スルヿヲ得

申立ノ許否ニ付テノ裁判及ヒ裁判ノ不服申立ニ付テハ追完シタル訴訟行爲ニ付キ此等ノ關係ニ於テ行ハル、成規ヲ適用ス然レ𪜈申立ヲ爲シタル原告又ハ被告ハ故障ヲ爲スノ權ナシ

原狀回復ノ費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサリシモノニ限リ申立人ノ負擔ニ歸ス

第五節　訴訟手續ノ中止及ヒ延引

第二百十七條　原告又ハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テ承權人カ訴訟手續ヲ引受クルマテ之ヲ中止ス

引受ヲ遲滯シタルトキハ承權人ヲ其引受ノ

爲メ及ヒ同時ニ本事件ノ辯論ノ爲メ呼出スヿヲ得

呼出ヲ載スル書面ハ承權人其者ニ之ヲ送達ス其呼出期間ハ裁判長之ヲ定ム

承權人期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ其主張セラレタル承權ヲ自認シタルモノト看做シ且裁判所ハ懈怠判決ヲ以テ承權人カ訴訟手續ヲ引受ケタリト言渡ス又本事件ノ辯論ハ故障期間ノ滿了シタル後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結ノ後始メテ之ヲ爲ス

第二百十八條　原告又ハ被告ノ財產ニ付キ破產ノ開始シタル場合ニ於テハ訴訟手續ハ破產財團ニ關スルトキハ破產ニ付キ行ハル、規定ニ從ヒ之ヲ引受ケ又ハ破產手續ヲ解止スルマテ之ヲ中止ス

第二百十九條　原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代人カ死亡シ又ハ原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ得スシテ其代理權ノ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ法律上代人又ハ新法律上代人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ繼續スル意思ヲ其代人ニ通知スルマテ之ヲ中止ス

第二百二十條　原告又ハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ノ中止スル場合ニ於テ遺產ニ付キ保

管人カ任設セラレタルトキハ第二百十九條ノ成規ヲ適用シ又遺産ニ付キ破産カ開始スルトキハ訴訟手續ノ引受ニ關スル第二百十八條ノ成規ヲ適用ス

第二百二十一條　辯護士訴訟ニ於テ原告若クハ被告ノ辯護士カ死亡シ又ハ其代理ヲ續行スルノ能力ヲ失ヒタルトキハ新ニ任設セラレタル辯護士カ其任設ヲ相手方ニ通知スルマテ訴訟手續ヲ中止ス

此通知カ遅滞セラルヽトキハ原告若クハ被告其者ヲ本事件辯論ノ為メ呼出シ又ハ之ニ對シ裁判長ノ定ムヘキ期間内ニ新ナル辯護士ノ任設スヘキヿヲ催告スルヿヲ得其催告ニ

應セサルトキハ訴訟手續カ引受ケラレタルモノト看做サル又新ナル辯護士ノ任設ヲ後ニ通知スルマテ通知ノ義務アル原告若クハ被告ニ對スル總テノ送達ハ其原告若クハ被告カ受訴裁判所ノ所在地ニモ又受訴裁判所所在地ノ區裁判所管轄内ニモ住居セサルトキニ限リ郵便ニ交付シテ「第百六十一條」之ヲ為スヿヲ得

第二百二十二條　戰爭又ハ其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此情况ノ繼續スル間訴訟手續ヲ中止ス

第二百二十三條　法律上代人ノ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其欠缺スル場合ニ於テ「第

二百十七條、第二百十九條訴訟代人ニ因リ代理カ爲サレタル𪜈ハ訴訟手續ヲ中止セス然レ𪜈受訴裁判所ハ訴訟代人ノ申立ニ因リ訴訟手續ノ延引ヲ命シ又死亡ノ場合ニ於テハ相手方ノ申立ニ因リ其延引ヲ命ス

訴訟手續ノ延引ノ時間及ヒ其引受ハ第二百十七條、第二百十九條、第二百二十條ノ成規ニ從フ又死亡ノ場合ニ於テハ呼出ヲ載スル書面ヲ訴訟代人ニモ送達スルコトヲ要ス

第二百二十四條　原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スル𪜈又ハ官命戰爭若クハ其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ヲ絶タ[illegible]レタル地ニ在ル𪜈ハ受訴裁判所ハ障碍ノ除去セラル、マテ亦職權ヲ以テ訴訟手續ノ延引ヲ命スルコトヲ得

第二百二十五條　訴訟手續延引ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ裁判所書記ノ面前ニ於テ之ヲ陳述シ其調書ヲ作ラシムルコトヲ得

裁判ハ豫メ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第二百二十六條　訴訟手續ノ中止及ヒ延引ハ各期間ノ經過ヲ止メ及ヒ中止又ハ延引ノ終リタル後更ニ全期間ノ經過ヲ始メシムルノ効力ヲ有ス

中止及ヒ延引中本事件ニ付キ原告又ハ被告

ノ爲シタル訴訟行爲ハ他ノ一方ニ對シ法律上ノ効力ヲ有セス

口頭辯論ニ基キテ爲スヘキ裁判ノ言渡ハ此辯論ノ終結シタル後ニ始マリタル中止ニ因リ妨ケラルヽヿ無シ

第二百二十七條　中止シ又ハ延引シタル訴訟手續ノ引受及ヒ此節ニ記載シタル通知ハ書面ノ送達ニ因テ之ヲ爲ス

第二百二十八條　原告被告ハ訴訟手續ヲ休止スヘキヿヲ合意スルヿヲ得其合意ハ不可變期間ノ經過ニ影響ヲ及ホサス

口頭辯論ノ爲メノ期日ニ於テ原告被告雙方カ出頭セサル𪜈ハ訴訟手續ハ其一方ヨリ新ナル呼出狀ヲ送達セシムルマテ之ヲ休止ス

第二百二十九條　此節ノ成規又ハ其他ノ法律上ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ延引ヲ命スル裁判又ハ之ヲ否ム裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スヿヲ得但拒否ノ場合ニ於テハ即時ノ抗告ヲ爲スヿヲ得

古記

三月廿四日配付

目次

第三節　採證總則
第四節　人證

民事訴訟法新草案

第十三回

二月廿六日

未定

公

第三節　採證總則

第二百五十八條　原告被告ノ各方ハ其攻撃又ハ防禦ノ方法ノ基本タル事實ニ關シ擧證ノ義務アリ

原告ハ其起シタル請求ノ發生ニ必要ナル事實ヲ證シ被告ハ其場合ニ於テ請求ノ發生ヲ妨ケラルヽ事實又ハ請求カ發生シタル限リハ先ツ之ヲ制限シ解止シ若クハ無効トスヘキ事實ヲ證スルヿヲ要ス又原告被告ノ各方ハ其他ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ノ重要ナル基本ヲ成セル事實ヲ證スルヿヲ要ス

第二百五十九條　事實ハ其證スヘキ事實ノ眞僞ヲ推測スルノ起因タル事實ノ提示ニ因リ

未之

之ヲ證シ又ハ駁撃スルヿヲ得

~~第二百六十條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限リハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル採證ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ムヘキヤ否ヤ自由ナル心證ヲ以テ裁判ス~~

第二百六十一條 損害ノ有無及ヒ其數額又ハ賠償スヘキ利益ノ多寡ニ付キ原告被告間ニ於テ爭アルトキハ裁判所ハ總テノ情状ヲ斟酌シ其意見ヲ以テ之ヲ裁判ス又豫メ其申立テラレタル採證ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定人ニ因レル鑑定ヲ命スヘキヤ否及ヒ如何ナル限度ニ於テ之ヲ命スヘキヤハ裁判

未之

所ノ意見ニ任カス

裁判所ハ此章第八節ノ規定ニ依リ職權ヲ以テ原告ヲモ亦證人トシテ訊問スルヿヲ得但他ノ採證カ申立テラレタルト否トヲ問フヿ無シ

~~第二百六十二條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張カ疏明セラルヘキトキハ判事ノ意見ニ随ヒ其主張ヲ眞實ナルヘシト認メシムヘキ挙證方法又ハ挙證理由ヲ以テ足ル~~

~~挙證者ハ採證カ即時ニ爲サルヽヿヲ得ヘキキニ限リ之カ爲メ總テノ適法ノ挙證方法ヲ用ユルヿヲ得~~

挙證者ハ其主張ノ眞實ニ付キ證人トシテ訊

未定

問ヲ受クルヿヲ許サルヽヿヲ得

第二百六十三條　原告又ハ被告ノ主張シタル事實ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ證スルヿヲ要セス

第一　其事實カ裁判所ニ在テ顯著ナル片

第二　其事實カ民法又ハ此法律ノ規定ニ従ヒ他ノ確定シタル事實ニ因リ推定セラルヘキ片

第三　其事實カ口頭辯論ノ期日ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ相手方ヨリ自認セラレタル片

五月廿日討了

第二百六十四條　前條第一號ノ場合ニ於テ事實カ顯著ナリト看做サルヘキヤ否ハ裁判所

削　削

之ヲ定ム

前條第二號ノ場合ニ於テ推定ニ對シ反證ヲ許スヘキヤ否ハ民法及ヒ此法律ノ成規ニ依ル

第二百六十五條　裁判所ニ於ケル自認ヲ有効ナラシムルニハ相手方ノ臨席又ハ其認諾ヲ要セス

裁判所ニ於ケル自認ノ効力ハ獨立ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ包含スル主張ヲ之ニ添附スルニ因テ妨ケラルヽヿ無シ

裁判所ニ於ケル事實ノ承認カ他ノ附加又ハ制限スル主張ニ因テ自認タルノカヲ失フヘキヤ否及ヒ之ヲ失フヘキ限度ハ總テノ情

削　削　削

況ヲ斟酌シテ之ヲ定ム

第二百六十六條　裁判所ニ於テ自認ハ自認カ眞實ニ適セサル丁及ヒ其事實ニ付テノ錯誤ニ起因シタル丁ヲ證スル片ニ限リ之ヲ廢罷スル丁ヲ得

第二百六十七條　裁判所外ニ於テ又ハ書面又ハ他ノ爭訟ニ於テ爲シタル自認ノ効力ハ判事ノ判定ニ任カス

第二百六十八條　裁判所ハ原告被告ノ申立テタル舉證方法外ニ涉リ職權ヲ以テ爭訟關係ヲ審査スルノ權ナシ但左ノ場合ハ此限ニ在ラス

第一　外國ノ現行法又ハ内國ノ各地慣習法、商ヒ慣習、各地規約又ハ社團規約ニ關シ裁判所カ其原則ヲ知ラサル片ハ原告被告ノ申立ナシト雖モ必要ナル取調ヲ爲ス丁ヲ得

第二　事件ノ關係ヲ他ノ方法ニテ明白ナラシムル丁能ハサル片ハ裁判所ハ職權ヲ以テ檢證及ヒ鑑定人ニ因レル鑑定ヲ命シ且原告被告ヲ證人トシテ訊問スル丁ヲ得

第二百六十九條　採證ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ通例トス

採證ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ判事一名又ハ區裁判所ニ之ヲ任カスル丁ヲ得

第二百六十三条 採証ニ付時間ヲ[illegible]
定メタル~~[illegible]~~障碍アル
トキハ申立ニ因リ相当ノ期間ヲ
定メルコトヲ要ス若シ其期間
ヲ徒過セシメタルトキハ訴
訟手続ヲ遅滞セシメサルトキニ
限リ其挙証方法ヲ用ユ
ルコトヲ得

前條ノ採證命令ニ 其決定ニ對シ不服ヲ申立ツルコヲ得ス

第二百六十三條 原告被告ノ申立テタル證據〈裁判長ノ〉ヲ

採ルヘキ程度ハ裁判所之ヲ定ム

原告被告ノ演述ニ次キ直チニ採證ヲ爲サス

シテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又

ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之

ヲ爲スヘキトキハ採證決定ニ因リ採證ヲ命ス

ルコヲ要ス

第二百六十四條 採證決定ハ左ノ諸件ヲ具備

ス

第一 舉證方法ヲ〈申立テ〉援唱シタル原告若クハ被

告ノ氏名

第二 證スヘキ係争事實ノ表示

第三 舉證方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人

ヲ訊問スヘキトキハ其氏名身分職業及ヒ住

所

第二百六十五條 採證決定ノ變更ハ其決定ノ完結前ニ於テハ當事者（又ハ職権ヲ以テ前ノ辯論ニ基キ之ヲ）ニ對シテハ不服ヲ申

立ツルコトヲ得ス

第二百六十六條 採證決定ノ執行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百六十七條 受命判事又ハ受託判事ノ面

前ニ於ケル採證ハ之ヲ爲サス

採證ノ期日〈ヲ定メタルトキハ之ヲ〉原告被告ニ之ヲ通知スルコトヲ

要ス原告被告ノ一方又ハ雙方カ出頭セサル

事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ採證

ヲ爲スコトヲ要ス

第二百七十四條 受命判事又ハ受託判事ノ面

第二百六十六条 採証カ受
訴裁判所ノ[illegible]ニ因リ右
[illegible]ハ採証決定ニ之ヲ言渡スト
裁判長ハ受命判事ヲ[illegible]
ヌルヨリ採証ノ期日ヲ定ム若シ
期日ヲ定メサルトキハ受命
判事之ヲ定ム（六）受命判事
其命令ヲ執行スヘキ者ヘア
ルトキハ裁判長ハ他ノ判事ヘ
ヲ命ス

第二百六十七条 採証カ他ノ裁判所ニ
於テ為サルヘキトキハ裁判長ハ其嘱
託書ヲ発スヘシ
採証[illegible]當[illegible]
受訴裁判所ノ[illegible]
書記ニ之ヲ送致シ裁判
所書記ハ其[illegible]
ヘツ[illegible]通知
スルコトヲ要ス

前ニ於テ採證ニ際シ異議ノ申立アリタル片ハ其判

第九十七條ノ

事又ハ完結スル

此異議ニ付テ

ニアラサレハ採證ヲ續行スヘカラス

裁判ハ受訴裁判所之ヲ爲ス然レトモ採

證ハ異議ニ付テノ裁判ニ繫ラサル限リハ之ヲ

續行ス

二百七十七條ヘ移ス

○第二百七十五條 採證ニ關スル審問書ハ原本ニテ受命判事又ハ受託判事ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ交付シ又ハ送致ス其受領ニ付テハ原告被告ニ之ヲ通知スルヿヲ要ス

第二百七十六條 外國ニ於テ爲スヘキ採證ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐劄ノ本邦公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託書ハ第百七十六條第百七十七條及ヒ

新 第二百七十五條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ因リ採證ヲ爲スヿヲ適當ト爲ス理由ノ生シタル片ハ其裁判所ニ採證ヲ囑託スルノ權ヲ有ス此場合ニ於テハ受訴裁判所ニ通知スヘシ○

新 第二百七十五條ノ二 當事者ノ一方又ハ雙方カ採證ノ期日ニ出頭セサル片ハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ採證ヲ爲スヿヲ要ス

第百[illegible]十[illegible]條ノ規定ヲ準用ス

二百七十[illegible]條ヘ移ス

第二百七十七條 採證ニ對シ不定時間ノ障碍アル片ハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定ムルヿヲ要ス若シ此期間ヲ徒過セシメタル片ハ訴訟手續ヲ遲滯セシメサル限リニ於テ其證方法ヲ用ユルヿヲ得

第二百七十八條 原告被告ハ採證ノ結果ニ付キ受訴裁判所ニ於テ口頭辯論ヲ爲ス受訴裁判所ニ於テ採證ヲ爲シタル片ハ採證ニ次キ直チニ此辯論ヲ爲ス但裁判所カ新期日ノ指定ヲ相當トシタル片ハ此限ニ在ラス受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ採證ヲ爲シタル片ハ採證ニ關スル審問書ノ受領後

以テ第二百七十九條ノ義
第二百七十九條 [illegible]
[illegible]

口頭辯論ノ爲メ新期日ヲ定ム

第二百七十九條 原告又ハ被告カ採證ノ結果ニ付テノ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ從前ノ辯論ノ旨趣ニ從ヒ且出頭シタル原告又ハ被告ノ演述ヲ斟酌シテ裁判ヲ爲ス

其場合ニ於テ出頭シタル原告又ハ被告カ新ナル申述ヲ提出シタルトキハ出頭セサル原告又ハ被告ニ對シテハ猶ホ出頭シテ辯論シタル原告又ハ被告カ相手方ノ申述ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ之ヲ拒ミタルトキノコトク之ヲ取扱フ

原告被告雙方カ出頭セサルトキハ第四百二條

ノ規定ヲ準用ス

第二百八十條 裁判所ハ裁判ヲ爲スニ際シ採證決定ノ旨趣ニ因テ羈束セラルヽコト無シ

二百十四條ニ換ル

第二百八十一條 裁判所ハ事件カ未タ判決ヲ爲スニ熟セサルトスルトキハ採證ノ補充ヲ決定スルヿヲ得

ニ號ノ本文ニ換ル

ニ號ノ本文ニ換ル

原告又ハ被告ノ出頭セサルニ因リ全部又ハ一分ノ採證ヲ爲スヿヲ得サル場合ニ於テ其追完又ハ補充ハ之カ爲メ訴訟手續カ遲滯セシメサルトキ又ハ舉證者カ其過怠ニアラスシテ前期日ニ出頭シ能ハサリシヿヲ疏明スルトキニ限リ申立ニ因リ之ヲ許ス

判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテニ

第二百七十三條 採證又ハ其採證カ [illegible]
職權ヲ以テ之ヲ定ム

第二百八十二條 裁判所ハ相當ノ期間ヲ定メ

六月十一日議了

採證ノ費用ヲ原告又ハ被告ノ各方ヨリ豫納セシムルコトヲ得若シ此命令ニ從ハサル片ハ採證ヲ爲サス
（[illegible]）

第四節　人證

第二百七十七條　何人ニテモ法律ニ別段ノ成規ナキ限リハ民事爭訟ニ付キ裁判所ニ於テ證據ヲ述フルノ義務アリ

二百七十八条
公ノ吏員ハ退職シタル片ト雖モ其職務上默秘スヘキ務ニ關スル事項ニ付テハ其本屬廳又ハ其最後ノ本屬廳ノ許可ヲ得タル件ニ限リ之ヲ證人トシテ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス
其許可ハ證據ヲ述フル爲國ノ安寧ヲ害スル恐アル片ニ限リ之ヲ拒ムコトヲ得
受訴裁判所ハ其許可ヲ乞ヒ且之ヲ證人ニ通知スヘシ

第二百七十九條　原告又ハ被告ノ各方ハ其主張ヲ證スル爲メ用井ントスル證人ノ氏名身分職業及ヒ住所ヲ申立ツルコトヲ要ス

（裁判所ハ採證決定ノ旨趣ニ依リ證人ノ呼出ヲ命ス）

第二百八十條　證人ノ呼出状ニハ左ノ諸件ヲ掲クルコトヲ要ス

第一　證人ノ氏名身分職業及ヒ住所ノ表示（原告被告）

~~第二　原告被告ノ氏名身分職業及ヒ住所ノ表示~~

第二　採證決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實

第三　證人ノ出頭スヘキ期日ニテ場所、年月日及ヒ時ヲ以テ表示

第四　出頭セサル片ハ法律ニ依リ處スヘキ懲罰ノ戒示

第五　裁判所ノ名稱

別

呼出状ノ送達ト期日トノ間ニハ少ナクモ三日ノ時間アルコトヲ要ス

第二百八十~~六~~一條　~~海陸軍ノ軍隊ニ在ル下士官及ヒ兵卒~~（現役軍人軍屬ヲ証人トシ）ノ呼出ハ其直近上班ノ~~指~~司令官廳ノ長官ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官ハ期日ヲ遵守セシムルカ爲メ證人ノ闕勤ヲ許ス~~又ハ~~スヘシ若シ軍務上之ヲ許ス丁能ハサル時ハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムルノ囑託ヲ爲スノ義務アリ

第二百八十~~七~~二條　適式ニ呼出サレタル證人ニシテ充分ナル理由ナクシテ出頭セサルモノニ對シテハ其出頭セサルニ因リ生シタル費用ヲ賠償スルノ義務ヲ負ハシメ及ヒ二十圓以下ノ~~過料~~罰金ヲ言渡ス~~ヘシ~~決定ヲ爲ス

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ~~過料~~罰金ヲ言渡シ又ハ其~~引致~~勾引ヲ命スル丁ヲ得

~~右ノ~~此決定ニ對シ證人ハ抗告ヲ爲スノ權アリ

抗告ハ執行~~猶豫~~停止ノ効力ヲ有ス

~~海陸軍ノ軍隊ニ在ル~~（現役ノ）軍人軍屬ニ對スル~~過料~~罰金ノ言渡及ヒ其執行ハ~~其軍人軍屬ノ等級如何ヲ問ハス~~軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス軍人軍屬ノ~~引致~~勾引ニ付テモ亦同シ

訖

三月三十日配付

議案下十九

民事訴訟法草案

第十四回

第十節　判決

第二百七十一條　本事件又ハ豫メ特別ニ究結又ハ[illegible]争點カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ノ辯論及ヒ裁判ノ爲メ互ニ併合セル数箇ノ訴訟ノ中ノ其一ニノミカ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ亦前項ニ同シ

第二百七十二條　同一ノ訴ニ於テ起サレタル数箇ノ請求ノ中[illegible]求ニ熟スルトキハ裁判ヲ爲スニ熟スル請求ニ付キ判決ヲ發ス

然レモ裁判所ハ事件ノ程度ニ隨ヒ一分ノ判決ヲ相當ナリトセサルトキハ其發下ヲ爲サヽ

ルヿヲ得

十分ナル判決其モノニ對シテハ特ニ上訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルヿヲ得

削

第二百廿三條
各箇ノ獨立ナル攻撃
若クハ防禦ノ方法又ハ
中間ノ爭ニ付裁判ヲ爲
スニ熟スル時ハ中間判決
ヲ以テ之ヲ裁判スルヿヲ
得

第三百七十三條　前條ノ規定ハ左ノ場合ニ之ヲ準用ス

第一　請求ノ一分ノミ又反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ訴若クハ反訴ノミカ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

第二　被告カ訴ニ於テ主張シタル請求ト法律上相牽連セサル反對請求ヲ相殺ノ爲メ主張シ訴ノ請求ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

第三百~~七~~三十~~四~~五條　損害賠償ノ訴[illegible]ノ訴

ストシテ其類スル場合ニ於テハ請求ノ~~理~~原由及ヒ數額カ爭ハレタルトキハ裁判所ハ先ツ其~~理~~原由ニ付キ裁判ヲ爲スヿヲ得

請求ノ~~理~~原由ヲ相當ナリト宣言（ハ上訴ニ關シテハ終局裁判ト看做ス）ス特ニ上訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルヿヲ得其判決確定ニ至ルマテハ（前條）其他ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論スヘキヿヲ命スルヿヲ得

前項末段ノ場合ニ於テハ第二百三十五條第四項及ヒ第五項ノ規定ヲ準用ス

削

第二百~~七~~二十~~五~~七條　判決ハ辯論セラレタル総テノ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包括スルヿヲ要ス然レトモ數箇ノ（獨）立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法

第廿六条　原告又ハ被告カ
ハ口頭辯論ニ於テ其訴ヘ[illegible]
タル請求ノ權ヲ拋棄シ
又ハ其一方ノ請求ヲ認諾
スル時ハ裁判所ハ申立ニ因リ
其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲スヘシ

カ主張セラレ其中ノ一箇ヲ功効アリトスル
キハ裁判所ハ其他ノモノヲ判定スルノ義務
ナシ

五月十八日議了

割

第三百七十六條　裁判言渡ハ原告ノ起シタル訴ヲ却下スヘキコト又ハ訴ノ申立ニ因リ被告ノ敗訴ヲ判決スルコトノミヲ以テ足レリトセス其却下ノ場合ニ於テハ却下セラレタル請求ヲ又判決言渡ノ場合ニ於テハ被告ノ責ニ帰スヘキ給付、行為、寛假又ハ不行為ヲ判決式文ニ明確ニ表示スルコトヲ要ス

割

第三百七十七條　請求ヲ起スコト早キニ過キタルノ故ノミヲ以テ其請求カ正當ナラストセラレタルキハ現時ノ却下ノミヲ判決式文ニ

於テ言渡スコトヲ要ス

第三百二條　裁判所ハ原告又ハ被告ノ其申立テサル事項ニ付キ裁判スルノ権ナシ

一物ヲ要求シ又ハ被告ニ帰セシメ

有ニ帰セシムルノ権ナシ

終局判決ヲ為ス場合ニ於テハ

裁判所ハ訴訟費用ノ負擔ニ関スル義務ニ限リ申立アラサルモ判決スルコトヲ要ス然レモ裁判所ハ一分ノ判決ニ於テ費用ノ点ニ付テノ裁判ヲ後日ノ判決ニ留保スルコトヲ得

為ス場合ニ於テハ

ニ讓ル

第三百二條　判決ハ其判決ノ基本タル口頭辯論ニ臨席シタル判事ノミ之ヲ為スコトヲ得

第四十九

第三百三十條　判決ノ言渡ハ口頭辯論ノ終リタル期日ニ於テ之ヲ為シ又ハ直チニ指定シ

ラルヘキ期日ニ於テ之ヲ宣告ス但此期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百八十一條　判決ハ判決式文ノ朗讀ニ因リ之ヲ言渡ス

總テ判決ハ其式文ヲ作ラサル以前ト雖モ之ヲ言渡スコトヲ得

第二百八十二條　同時ニ裁判理由ノ重要ナル旨趣ヲ言渡ス

ヲ言渡スヘシ又ハ[illegible]ト認ムル時ハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ其要領ヲ口述ス

第二百八十二條　判決言渡ノ効力ハ原告被告ノ在否ニ拘ハラス

[illegible]

第二百八十三條　判決ノ調製ハ裁判長又ハ其指定シタル判事ノ任トス

判決書ニハ左ノ諸件ヲ包含ス

第一　原告被告及ヒ其法律上代人ノ氏名身分、職業及ヒ住所ノ表示

第二　爭訟ノ事實關係及ヒ權利關係ノ簡略

原告被告ノ口頭陳述ヲ摘示シ且提出シタル申立ヲ表シタル事實及ヒ爭ノ係點摘示

サル記載ニテ提出セラレタル申立ヲ掲ケタルモノ

第三　裁判ノ理由

第四　裁判ノ判決式文

第五　裁判所ノ名稱裁判ニ參與シタル判事ノ官氏名幷ニ其官名及ヒ立會シタル裁判所書記ノ氏名幷ニ其官名

擔事ノ辯論ニ參與シタル判事ハ其旨ヲ判決書ニ附記ス

第二百八十四條　判決書ノ原本ニハ裁判ニ參與シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アルキハ其理由ヲ明示シテ裁判長其旨ヲ判決書ニ附記シ裁判長差支ア

ルトキハ先任ノ陪席判事之ヲ附記ス

首席若クハ

判決書ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付スルヿヲ要ス

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本ヲ領収シタル日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印スルヿヲ要ス

第二百八十五條　原告被告ノ各方ハ判決書ノ送達ヲ申立ツル~~權ヲ有ス~~ヿヲ得其申立カ爲サレタルトキハ判決書ノ正本ヲ申立人及ヒ相手方ニ送達スルヿヲ要ス

可シ

~~[illegible]~~

~~[illegible]~~

第二百八十六條　判決ヲ未タ言渡サス及ヒ未タ之ニ署名捺印セサル間ハ其正本、抜書及ヒ謄本ヲ付與スルヿヲ得ス

[illegible]

裁判所書記ハ右ノ正本、抜書及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認證スルヿヲ要ス

~~第二百八十七條　裁判所ハ其言渡シタル判決ニテ訴訟ノ全部又ハ一分ヲ完結スルモノ中ニ包含セラレタル裁判ニ羈束セラル~~

及ヒ中間判決中ニ包含セラレタル判斷ニ羈束セラル

係屬

~~裁判所ハ判決ヲ廢棄スルヿヲ得ス又裁判所ハ下ノ二個條ノ規定ヲ留保シ判決ニ追加ヲ爲シ又ハ其他ノ變更ヲ爲スヿヲ得ス~~

第二百八十八條　裁判所ハ判決書中ニ於ケル違算書損及ヒ之ニ類スル著シキ誤謬ヲ何時ニテモ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更正スルヿヲ要ス

二項　更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ裁判スルヿヲ得

三項　更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヿヲ得

第二百三十九條　主タル請求若クハ附帯ノ請求又ハ費用ノ全部若クハ一分ヲ裁判ニ際シ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充スルヿヲ要ス

追加裁判ノ申立ハ判決ノ言渡後直チニ為サレサルトキハ遅クモ判決書ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ為スヿヲ要ス

其申立ニ付テハ直チニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭弁論ヲ為スヿヲ要ス其弁論ハ争訟ノ完結セラレサル部分（ニ限リ之ヲ為ス）~~ヲ以テ目的トス又其申立ニ付テハ期日ニ原告被告ノ双方カ出頭セスト雖モ裁判ヲ為スヿヲ要ス出頭セル原告又ハ被告ハ故障ヲ申立ツルノ権ナシ~~

未定
五百十九ヲ削ル

第二百四十條　判決ヲ更正シ又ハ之ヲ補充スル裁判ハ判決ノ其ノ成分ニシテ之ヲ原本及ヒ正本ニ加フルヿヲ要ス（若シ正本ニ之ヲ加フルヿヲ得サルトキハ更正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ルヿヲ要ス）

第二百四十一條　判決式文ニ包含セラレタル裁判其モノニ限リ確定ノモノト為ルヿヲ得其理由ハ確定ノモノト為ルヿヲ得ス

第二百四十二條　口頭弁論ニ基キ（裁判所ノ）決定ヲ発ス（ルトキハ之ヲ）言渡スヘキヿヲ要ス

判決ニ関スル第二百三十一條ヨリ第二百三十三條、第二百三十六條及ヒ第二百三十七條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長若クハ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡サヽル裁判所ノ決定及ヒ言渡サヽル裁判長若クハ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職権ヲ以テ当事者ニ之ヲ送達スルヿヲ要ス

第二百四十三條　予メ口頭弁論ヲ経スシテ為ス裁判ニハ第三百八十六條及ヒ第三百八十

削

七條ノ規定ヲ準用ス

第十一節　口頭闕席判決

第[illegible]百[illegible]十[illegible]條　口頭辯論ノ期日ニ原告又ハ被告カ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル相手方カ闕席判決ヲ申立ツルトキハ此判決ヲ為ス

其請求ヲ拋棄シタルモノト看做シ

第[illegible]百九十五條　出頭セサル一方カ原告ナルトキハ裁判所ハ闕席判決ヲ以テ原告ノ請求ヲ拋棄シタルモノト看做シ其訴ヲ却下スル闕席判決ヲ以テ言渡スコトヲ要ス

第[illegible]百[illegible]十[illegible]條　出頭セサル一方カ被告ナルトキハ裁判所ハ被告[illegible]原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自認シタルモノト看做ス

前項ノ理由ニ基キ若シ原告ノ提出シ其起シタル請求ヲ正當ト為スニ足ルトキハ闕席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其然ラサルトキハ原告ノ訴ノ却下ヲ言渡スコトヲ要ス

若シ然ラサルトキハ[illegible]

民法ニ因リ

~~第[illegible]百[illegible]十[illegible]條　反訴ノ場合ニ於テ反訴原告トシテ出頭セサル被告ニ對シ第[illegible]百[illegible]十[illegible]條ノ規定ヲ準用シ又反訴被告トシテ出頭セサル原告ニ對シテハ第[illegible]百[illegible]十[illegible]條ノ規定ヲ準用ス~~

二十九條ノ削ル

第[illegible]百[illegible]十[illegible]條[illegible]定期日ニ於テ又ハ[illegible]ル口頭辯論ノ期日又ハ證據決定[illegible]言渡ノ前若クハ後ニ於テ[illegible]辯論續行ノ爲メニ定メタル期日ニ出頭セサルモノ[illegible]本論期日ト看做ス

第[illegible]百[illegible]十[illegible]條　原告又ハ被告ニ辯論ニ出頭スルモ辯論ヲ為サヽルモノ又ハ其辯論ヲ為サヽル前ニ第二百五十三條又ハ第二百五十條ニ

規定ニ依リ任意ニ退~~席~~廷シタル時ノ如キ取
扱ハルヘキモノハ（合）出頭セサルモノト看做ス

第二百四十八條　原告又ハ被告カ辯論ヲ爲シ
タル時ハ各箇ノ事實、證書又ハ其發セラレタ
ル問ニ付キ陳述ヲ爲サスト雖モ此節ノ規定
ヲ適用セス

第四百條（四十九）　左ノ場合ニ於テハ闕席判決ヲ爲ス
ノ申立ヲ却下シ且出頭シタル原告又ハ被告（ハ）
ヲ呼出シテ口頭辯論ノ新期日ヲ定ム（申立ルコトヲ得）
ル要ス但其却下ニ對シ抗告ヲ爲スヲ許サ
ス

第一　出頭シタル原告又ハ被告カ（裁判所ノ職權上）適式ニ呼

（被告ハ事情ニ付キ必要ナル証明ヲ為スヿ能ハサル時）
出サレサリシ時

第二　出頭セサル原告又ハ被告カ天災若ク
ハ其他避クヘカラサル事變ニ因リ其出頭
ヲ妨ケラレタルヿヲ眞實ト認メシムヘキ
情況カ知レタル時

第三　出頭シタル原告又ハ被告カ（口頭ノ辯論ニ於テ）裁判所ノ職
メ重要ナル事實上ノ~~申~~（供）述ヲ爲シ又ハ其證
ヲ差出シ且出頭セサル原告若クハ被告ニ
適當ナル時ニ送達シタル書面ニ包含セラ
レサル申立ヲ提出シタル時

（辯論カ延期セラレタル時ハ出頭セサル原告又ハ被告ヲ新期日ニ呼出スヘシ）
右第三號ノ場合ニ於テハ出頭セサル原告又
ハ被告カ新提出ヲ載スル調書又ハ書面ノ送
達ヨリ期日マテニ必要ノ期間ヲ有スル樣定

メタル新期日キ之ヲ呼出スカヲ要ス

「下 右大臣ハ其官廳所在地ニ就テ之ヲ訊問シ若シ其所在地ニ滞在セサル時ハ其現在地ニ就テ之ヲ訊問ス」

「下 帝國議會議員ハ貴衆兩院開會期間議會所在地ニ滞在中ハ其地ニ就テ之ヲ訊問ス」

第二百八十~~八~~三條 證人ハ出頭セサリシコトカ後ニ於テ其疏明セラレ且ツ理由ヲ以テ充分ニ辯解セラレタルトキハ過料ノ言渡ヲ廢止スルコトヲ要ス

不參

證人ノ届出及ヒ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其之ヲ爲スコトヲ得

（調書ヲ作リテ之レ）（決定廢止）（ヲ述ヘ又ハ裁判所書記ニ）

第二百八十九條 皇族及ヒ勅任官ハ其所在ニ就キ受命判事又ハ受託判事之ヲ訊問ス

（證人ナルトキハ）（其所在ニ就キ）

第二百九十條 左ノ者ハ證據ヲ述フルコトヲ拒ムコトヲ得

（ニ揭ケル）

第一 刑法第百十四條及ヒ第百十五條ノ意義ニ於ル原告又ハ被告ノ親屬

第二 原告又ハ被告ニ後見セラルヽ者

「裁判長ハ前項ノ者ニ対シ其訊問前証拠ヲ述フルヲ拒ムノ権利ヲ有スルコトヲ告クヘシ」

第三　從者又ハ雇人トシテ原告又ハ被告ニ仕ヘ且之ト同居スル者又ハ雇人トシテ三ケ月ノ者

第二百九十八條　左ノ諸件ニ付テハ證據ヲ述フルヲ拒ムコトヲ得

~~諸件左ノ如シ~~

第一　公吏又ハ公吏タリシ者ハ其職務上默秘スルノ義務アル情況ニ付キ

第二　醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職、僧侶及ヒ教導職カ其役目身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ其默秘スヘキモノニ付キ

第三　問ノ答辯カ證人又ハ前條ニ揭ケタル其親屬ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招クノ恐アルトキハ其問ニ付キ

「第四　問ノ答辯カ證人又ハ前條ニ揭ケタル其親屬ニ對シ直接ニ財産權上ノ損害ヲ生セシムヘキトキハ其問ニ付キ

第五　證人カ技術又ハ職業ノ機密ヲ公ニスルニアラサレハ答辯スルコト能ハサル問ニ付キ

第二百九十七條　證人ハ左ノ事項ニ付テハ第二百九十六條第一號及ヒ第二百九十八條第四號ノ規揭ケタル場合ニ
~~定ヲ適用セスシテ證人ハ證據ヲ述フルヲ拒~~
ムコトヲ得ス

第一　家族中ノ者ノ出産、婚姻又ハ死亡

第二　家族ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實

「前條第一號第二號ニ揭ケタル者ハ其默祕スヘキ義務ヲ免除セラレタル時ハ證據ヲ述フルヲ拒ムヿヲ得ス」

第三　權利行爲ヲ成スノ際親屬カ證人トシテ立會フタルキ其成立及ヒ旨趣~~前~~先ヲ

第四　親屬自身カ原告又ハ被告ノ主又ハ其代人トシテ爲シタル行爲ニシテ爭アル權利關係ニ關スルモノ

第二百九十三條　證據ヲ述フルヲ拒ム證人ハ其訊問ノ爲メ定メラレタル期日前ニ書面又ハ期日ニ至テハ其拒絶ノ理由タル事實ヲ明示シ且之ヲ疏明スルヿヲ要ス

裁判所書記ニ述ヘ調書ニ記セシメ

證人カ其拒絶ヲ書面又ハ口頭ニテ陳述シ且其理由ヲ疏明シタルキハ期日ニ出頭スルノ義務ナシ

裁判所書記ハ拒絶ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ヲ調書ニ作リ之ヲ當事者ニ通知スヘシ

第二百九十四條　證據ヲ述フルヲ拒ムヿニ付テハ受訴裁判所ノ訟廷ニ於テ原告被告ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ裁判ス

拒絶ノ當否

~~拒絶ノ~~場合ニ於テハ證人カ拒絶ノ爲メ主張シタル理由ノ正當ナルヿヲ宣誓ヲ以テ確定スルヿヲ命スルヿヲ得

原告又ハ被告カ出頭セサルキハ決定ハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シ事件ノ程度ニ隨ヒ之ヲ發ス

擧證者及ヒ證人ハ決定ニ對シ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲スノ權アリ其抗告ハ執行停止ノ效力ヲ有ス

第二百九十[illegible]條　證據ヲ述フルヿヲ理由ノ明

二百九十条
第八十又ハ第八十一條第一項ニ掲ケタル
[illegible]ノ證人ト[illegible]
第二百九十二条第二百九十三條ノ例ニ依リ
アル片ハ其證人ヲ忌避ス
ルコトヲ得

示ナクシテ拒ミ又ハ其申立テタル理由カ確定ニ棄却セラレタル後ニ拒ミタル片ハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絶ニ因テ生シタル費用ノ賠償ノ義務及ヒ四十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償ノ義務及ヒ過料ノ言渡ニ對シ七日ノ期間内ニ抗告ヲ為スコトヲ得其抗告ハ執行停止ノ効力ヲ有ス

軍人軍屬ニ對スル過料ノ言渡及ヒ執行ハ其軍人軍屬ノ等級如何ヲ問ハス軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ為ス

第二百九十條　充分ナル理由ナクシテ出頭セサル證人又ハ其理由ヲ明示セスシテ證據

第二百九十二条
忌避ノ申請ハ訊問前ニ
之ヲ為スヘシ然レトモ訊問後ハ
其後新ニ忌避ノ理由ヲ生シ
又ハ之ヲ知リタリトノ事ヲ
疎明スルニアラサレハ忌避ス
ルコトヲ得ス
忌避ノ申請ハ書面ヲ以テ又ハ
裁判所書記ニ口述シテ之ヲ為ス
コトヲ得
忌避ノ理由ハ之ヲ疎明ス
ヘシ
六月二日議了

第二百九十三条　忌避ノ申請ニ
付テハ裁判所ハ口頭弁論ヲ
経スシテ之ヲ裁判スルコトヲ得
忌避ヲ理由アリト言渡ス決定ニ
對シテハ上訴ヲ為スコトヲ得ス忌
避ヲ理由ナシト言渡ス決定ニ對シテハ
即時抗告ヲ為スコトヲ得

~~ヲ述フルヿヲ拒ミ又ハ其申立テタル理由カ確定ニ棄却セラレタル後ニ拒ミタル證人ニ對シ舉證者ハ特別ノ訴ヲ以テ之カ為メ生シタル損害ノ賠償ヲ請求スルヿヲ得此場合ニ於テハ反對ノ證明アルマテハ證人ノ證スヘキ事實ハ證人之ヲ證シ得ヘキモノト看做サル~~

第二百九十四條　各證人ハ其携帯スヘキ呼出狀又ハ其他適當ノ方法ヲ以テ其人違ナラサルヿヲ判然ナラシメタル後其訊問前ニ別ニ宣誓スルヿヲ要ス

然レ氏宣誓ハ特別ノ理由アル片殊ニ其許否ニ付キ疑惑ノ存スル片ハ訊問ノ終ルマテ之

（第二百九十六條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ隠カルヤ）

第二百九十八條 證人ハ訊問セラルヽ前愛憎畏懼ノ心ナクシテ眞實ヲ漏ナク述ヘ眞實ノ外何事モ述ヘサルヿノ誓ヲ爲スヿヲ要ス

又證人ハ訊問（ヲ受ケ）タル後愛憎畏懼ノ心ナク（何事ヲモ默祕セス）眞實ヲ漏ナク述ヘ眞實ノ外何事モ述ヘサリシヿノ誓ヲ爲スヿヲ要ス

第二百九十九條 宣誓ヲ爲ス前宣誓者ニ對シ僞證ノ罰ヲ適當ナル方法ニテ諭示スルヿヲ得

第三百條（九十七） 證人ハ宣誓ヲ拒ミタル者ニ對シテハ第二百九十五條乃至第二百九十八條ノ成規ニ從ヒ其取扱ヲ爲ス

第二百九十九條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スルヿヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ至ラサル者

第二 必要ナル精神上ノ發達ヲ缺ケル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ一時喪失シタル者

第四 第二百八十五條及ヒ第二百八十六條ノ第三號幷ニ第四號ノ規定ニ依リ證據ヲ述フルヿヲ拒絶スルノ權アル人ニシテ其權利ヲ行用セサルモノ

（第五 訴訟ノ結果ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者）

第三百二條 證人ハ後ニ審訊セラルヘキ證人ノ在ラサル處ニ於テ各別ニ之ヲ訊問ス

證人ニシテ其供述互ニ齟齬スルトキハ之ヲ對

質セシムルコトヲ得

四月七日配付

民事訴訟法草案

第十五回

第二百五十条　闕席裁判ヲ求ムノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時ノ抗告ヲ為スコトヲ得其決定カ取消サレタルトキハ出頭セサリシ原告又ハ被告ヲ新期日ニ呼出ス~~ヲ要セス~~可カラス

第二百五十一条　裁判所ハ左ノ場合ニ於テ闕席判決ヲ求ムノ申立ニ付テノ辯論ヲ職權ヲ以テ延期スルコトヲ得

第一　出頭セサル原告又ハ被告カ適式ニ呼出サレサリシトキ

第二　出頭セサル原告又ハ被告カ天災~~因~~若クハ其他避ク可カラサル事變ニ因リ其出頭ヲ妨ケラレタルコトヲ其[illegible]ヲ認ムヘキ情況~~知レタルトキ~~アルトキ

出頭セサリシ原告又ハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出スヘシ

別

第四百一條　前數條ノ規定ハ左ノ場合ニ之ヲ準用ス

第一　原告又ハ被告カ口頭辯論ノ延期セラレタル期日又ハ口頭辯論ノ續行ノ爲メ定メラレタル期日ニ出頭セサルトキ

第二　妨訴ノ抗辯ニ付キ別ニ爲シタル辯論ノ終了シタル場合ニ於テ原告又ハ被告カ本事件ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ定メラレタル期日ニ出頭セサルトキ

第三　請求ノ基本ニ付キ豫メ裁判ヲ爲シタル場合ニ於テ原告又ハ被告カ數額ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ定メラレタル期日ニ出頭セサルトキ

削

削

出頭セサル原告又ハ被告カ前ニ爲シタル申述ハ闕席判決ヲ發スルニ際シ之ヲ斟酌セス

右第一號ノ規定ハ第二百四十二條及ヒ第二百四十三條ノ規定ニ依リ分離シテ辯論ヲ爲シ且其辯論終了シタル場合ニハ之ヲ適用セス

第四百二條　口頭辯論ノ期日ニ原告被告ノ雙方カ出頭セサルトキハ原告又ハ被告ヨリ口頭辯論ノ新期日ノ指定ヲ申立ツルマテ訴訟手續ヲ休止ス

其申立カ一个年ノ期間內ニ爲サレサルトキハ訴及ヒ被告ノ起シタル反訴ハ取下ケラレタルモノト看做サル

此規定ハ此法律ニ於テ別段ノ成規ナキ限リハ口頭辯論ノ爲メ定メタル總テノ期日ニ之ヲ適用ス

第四百三條（二）（五十二）　闕席判決ヲ受ケタル原告又ハ被告ハ此判決ニ對シ故障ヲ申立ツル[illegible]

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ闕席判決書ノ送達ヲ以テ始マル

送達カ外國ニ於テ爲ス可キトキハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲ス特別ノ決定ヲ以テ之ヲ定ム[illegible]ヲ要ス

故障申立ハ判決ノ送達[illegible]

不可變期間トス

又ハ公示送達ヲ以テ爲サル

第四百四條（二百五十三）　故障ノ申立ハ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ

三百五十六 判ル

其書面ニハ左ノ諸件ヲ掲クルヿヲ要ス

第一　故障ノ申立ヲ受クル闕席判決ノ表示

第二　此判決ニ對シ故障ヲ申立ツルヿノ陳述

其書面ニハ若シ原告又ハ被告ヨリ準備書面ヲ差出サヽリシトキハ本事件ニ付テノ口頭辯論ノ準備ノ爲メ必要ナル事項ヲモ亦掲クルヿヲ要ス然レトモ此要件ノ欠缺ハ故障ノ申立ノ有効ナルト[illegible]ルトニ影響ヲ及ホスヿ無シ

第四百五條　許スヘカラサルヿノ判然ナル故障又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テサル故障ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

廿日廿五日詳ク

却下ノ命令ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲スヿヲ得

第四百六條　前條ノ場合ヲ除クノ外故障ニ付テ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ原告被告ノ雙方ヲ呼出ス

第四百七條　裁判所ハ故障カ許サルヘキヤ否又故障カ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テラレタルヤ否ヲ職權ヲ以テ審査スルヿヲ要ス

若シ此要件ノ一カ缺クルトキハ判決ニ因リ故障ヲ不適法トシテ棄却ス

第四百八條　故障カ適法ナルトキハ訴訟ハ闕席ナリシ前ノ程度ニ復セラル

第四百九條　新辯論ニ基キ事件其モノニ於テ發スヘキ裁判カ闕席判決ニ包含セラレタル裁判ト符合スル限リハ此裁判ヲ維持スル丁ヲ言渡シ其然ラサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ闕席判決ヲ廢止ス

第四百十條　闕席判決ニ因テ生シタル費用ハ相手方ノ不正ナル異議ニ因テ生セサル限リハ故障ノ爲メ變更シタル裁判カ爲レタル場合ニ於テモ其闕席シタル原告又ハ被告ニ之ヲ課ス

第四百十一條　故障ヲ申立テタル原告又ハ被告カ口頭辯論ノ新期日ニ出頭セサルトキハ第四百條ノ理由ノ一ニ觸レサル限リハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却シ前裁判ヲ維持スル丁ヲ言渡ス

新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツル丁ヲ得ス

第四百十二條　故障期間ヲ懈怠シタル原告又ハ被告ハ左ノ場合ニ於テ非常故障ヲ申立ツルノ權アリ

第一　原告又ハ被告カ天災又ハ其他避ク可カラサル事變ニ因リ法律上ノ期間内ニ故障ヲ申立ツル丁ヲ妨ケラレタルトキ

第二　原告又ハ被告カ其過怠ニアラスシテ闕席判決書ノ送達ヲ知ラサルトキ

第四百十三條　非常故障ヲ申立ツル期間ハ

主定

新民訴

二百四十九條二百二十條ノ規定

四百十三

二百五十九条　故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準用ス

七日トス此期間ハ障碍カ止ミタル日又ハ原告若クハ被告カ闕席判決書ノ送達ヲ知リタル日ヲ以テ始マル

懈怠シタル故障期間ノ終ヨリ起算シテ一个年ノ満了シタル後ハ最早非常故障ヲ申立ツルヿヲ許サス

第四百十四條　非常故障ヲ申立ツル書面ハ第四百四條ノ要件ニ相當シ且非常故障ノ原由タル事實ヲ明示スルヿヲ要ス

第四百十五條　其他ノ訴訟手續ニハ第四百五條乃至第四百十一條ノ規定ヲ準用ス然レモ其申立人ハ相手方ノ陳述アルモ之ニ拘ハラス非常故障ノ理由タル事實ヲ疏明スルヿヲ要ス

非常故障ノ許否ニ付テノ訴訟手續ハ本事件ニ於テノ訴訟手續ト之ヲ併合スルヿヲ得

四月十三日配付

五紀

民事訴訟法草案　第十六回

第三百×條　證人ノ訊問ハ記人ニ其其身上ニ關係付[illegible]要スル問氏名、年齡、身分、職業及ヒ住居ヲ問フコトヲ以テ始マル證[illegible]提出シ又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於ケル信否ニ關スル情況ニ付テ持ニ原告被告トノ關係ノ問ヲ[illegible]提出スルヲ以テ始ムル

第三百ム條　證人ニハ其訊問事項ニ付キ知リタルモノヲ連續シテ述ヘシムル丁ヲ要ス證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其丁知リタル原由基本ヲ穿鑿スル為メ已ムヲ得サル場合ニハ尚ホ其他ノ問ヲ發スル丁ヲ要ス

第三百五條　證人ニハ其供述ノ得稿本ヲ朗讀シ又ハ其他ノ覺書ヲ用ユル丁ヲ許サス但證人ニハ其記憶スル事項ヲ忘タ明示シタル後始

~~ハ下書面ヲ展閲シテ其供述ヲ完全ナラシメ~~

~~及ヒ文ヲ更正スルヿヲ許スヿヲ得但證人ハ~~算数ノ関係ニ限リ其覚書ヲ直チニ用ユルヿヲ得

第三百三條　陪席判事ハ裁判長ノ許可ヲ得テ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルヿヲ得

原告被告ハ訊問ヲ中斷シテ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルヿヲ得ス然レ圧原告被告ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシムルカ為メ要用ナリト認ムル問ヲ發スルヿヲ裁判長ニ申立ツルハヲ得要ス

問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所直チニ之ヲ裁判ス

第三百四條　「各證人ノ供述ハ完全ニ之ヲ調書ニ記載シ且證人カ其訊問セラル、ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セスシテ訊問セラレタルヤヲ明記スルヿヲ要ス

調書六八

別

裁判所書記ハ調書中其訊問及ヒ其宣誓又ハ不宣誓ニ關スル部分ヲ證人ニ讀聞セ又ハ閲覽ノ為メ證人ニ之ヲ提示ス

證人ハ讀聞セ又ハ閲覽ノ際變更及ヒ追加ヲ求ムルヿヲ得裁判所書記ハ證人カ變更及ヒ追加ヲ求メタル旨ト共ニ其變更及ヒ追加ヲ調書ノ末尾又ハ緣邊ニ附記シ之ヲ證人ニ讀聞セ又ハ閲覽ノ為メ之ヲ證人ニ提示ス

調書ニ關シテハ第百五十四條第二項第百五十五條及ヒ第百五十六條ノ規定ヲ適

用ス

第五 其他裁判所ガ再訊問ヲ必要トスル片

第三百五條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ證人ノ再訊問ヲ命スル丁ヲ得

第一 證人カ法律上ノ規定ニ從ヒ訊問セラレサリシ片

第二 證人カ完全ニ訊問セラレサリシ片

第三 證人ノ供述カ不明又ハ兩義ナル片

第四 證人自ラ其供述ノ補充又ハ更正ノ為メ訊問セラレン丁ヲ申立ツル片

第三百六條 左ノ場合ニ於テ受訴裁判所ノ部員タル判事ニ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ嘱託シ證人ノ訊問ヲ委任スル丁ヲ得

第一 證人ヲ其場所ニ就キ訊問スル丁カ眞實ヲ探知スル為メ要用ナル片

第二 證人カ疾病又ハ其他ノ事由ノ為メ受訴裁判所ニ出頭スル丁ヲ妨ケラル、片

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔シタル地ニ在リテ其受訴裁判所ニ出頭スル丁カ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スヘキ片

若シ證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ出ツル丁能ハサル片ハ證人ノ所在地ニ就キ訊問ヲ為ス

六月八日始り

第三百七條 第二百八十二條、第二百八十三條第二百九十二條及ヒ第二百九十七條ニ掲ケタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ

受訴判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受訴判事ノ面前ニ於テ理由ヲ示シテ證據ヲ述フルヿヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權上ニテ若クハ原告被告ノ一方ノ申立ニテ發セラレタル問ニ答フルヿヲ拒ムヰハ此拒絶ノ正否ニ付テノ裁判ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受訴判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テラレタル問ヲ發スルヿヲ否ムヰハ原告若クハ被告ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルヿヲ得

第三百述條ノ場合ニ於ケル證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受訴判事ヨリ特ニ人テ之ヲ命

其意見ヲ以ス

削

スルヿヲ得

第三百十八條　證人ヲ申出テタル原告又ハ被告ハ其訊問ノ始マルマテハ此擧證方法ヲ抛棄スルノ權利アリ其後ノ抛棄ハ相手方ノ承諾ヲ以テノミ許サル

第三百十九條　各證人ハ日當ノ辨償及ヒ其出頭ニ付キ旅行ヲ要スルヰハ旅費ノ辨償ヲ請求スルヿヲ得又證人ハ其訊問アリタル期日ノ終リタル後直ケニ其領收スヘキ金額ノ確定ヲ求ムルヿヲ得

其確定ハ訊問ヲ指揮スル裁判所又ハ判事ヨリ費額表ニ準據シテ之ヲ爲ス其確定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヿヲ得ス

擧證者ノ豫納シタル費用カ不足ナルトキハ證人ノ為メ其~~確定シタル~~金額ヲ職權ヲ以テ取立ツ

格別

第六節　鑑定ニ因ル證據

第三百十一條 [illegible] 因リ又ハ職權 [illegible] 鑑定人ニ因ル證據ニ付テハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ人證ニ付テノ成規ヲ準用ス

第三百十四條　鑑定人ニ因テ證據ヲ擧ケント欲スル原告又ハ被告ハ鑑定スヘキ事項ヲ申立ツルコトヲ要ス

立會ハシムヘキ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ爲ス裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名ニ制限シ又何時ニテモ既ニ任命セラレタル者ニ代ヘテ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ得

七

裁判所ハ原告被告ニ對シ適當ナル人ヲ共同シテ申出ツルヿヲ催告シ且之カ爲メ相當ノ期間ヲ許與スルヿヲ得

第三百十二條　左ノ者ハ鑑定ヲ命セラレタルトキ之ヲ受クル義務アリ

第一　必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲メ公ニ任セラレタル者

第二　鑑定ヲ爲スニ必要ナル學識技術若クハ職業ヲ常務トシテ從事シ又ハ此學識若クハ技術ニ從事スル爲メ公ニ任セラレ若クハ委任セラレタル者

第三百十三條　鑑定人ハ證人カ證據ヲ述フルヿヲ拒ムヿヲ得ルト同一ノ理由ニ依リ鑑定ヲ拒ムノ權利アリ

條別

公ノ吏員ハ其上班官廳ノ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルヿヲ得ス

裁判所ニ於テ又ハ判事ノ面前ニ於テ鑑定ヲ爲サヽトスル旨ヲ述ヘタル者ハ~~鑑定人タル~~鑑定人タル義務ナキトキト雖モ本條第一項ノ規定ヲ[illegible]ヲ拒ムヿヲ得ス

[illegible]

第三百十四條　鑑定ヲ爲スノ義務アル鑑定人ノ出頭セス又ハ其鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ之カ爲メ生シタル費用ノ賠償又ヒ過料ヲ言渡スヿヲ要ス但其裁判ハ之ヲ許サス

第三百十八條　鑑定人ハ其鑑定ヲ爲スノ前其鑑定人タルノ義務ヲ公平且誠實ニ履行スヘ

キヿヲ宣誓スルヿヲ要ス

第三百十五條　受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ム

第一　鑑定ノ結果ヲ口頭又ハ書面ニテ述ヘシムヘキヤ

係削

（第二　數名ノ鑑定人ヲ審訊スヘキ場合ニ於テ互ニ異ナル意見アル片ハ之ヲ掲ケテ鑑定書ヲ共同ニ作ラシムヘキヤ又ハ其各人ヲシテ各別ニ之ヲ作ラシムヘキヤ

第二　口頭辯論ノ際鑑定人總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ說明セシムヘキヤ

立一

第四　鑑定ノ結果不充分ナル片ハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ為サシムヘキヤ

第三百~~二~~十六條　受訴裁判所ハ鑑定人ヲ任命スルヿヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルヿヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百十四條及ヒ第三百十五條ノ第一號~~并ニ第二號~~ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ行フ

第三百~~二~~十七條　鑑定人ハ日當、旅費及ヒ立替金ノ辨償ヲ請求スルヿヲ得此場合ニ於テハ第三百十九條ノ規定ヲ準用ス

第三百~~二~~十八條　實驗ノ爲メ特別ノ知識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ情況カ其知識アル者ノ

三百十九条書記ノ申出ハ
之ヲ提出セラシムカ為メ

訊問ニ因テ確定セラルヘキ片ハ人證ニ付テノ成規ヲ適用ス

第七節　書證

（第三百二十三條　官廳カ其職權ノ範圍内ニ於テ又ハ公證ヲ為スノ權アル人カ其委任セラレタル職務ノ範圍内ニ於テ定式ニ從ヒ作リタル證書（公證書）ハ下ノ數條ノ詳細ナル規定ニ依リ其旨趣ノ完全ナル證據ヲ成ス

（第三百二十四條　官廳ヨリ發シタル證書カ官府ノ布令、命令又ハ裁決ヲ包含スル片ハ其證書ハ此布令、命令又ハ裁決ノ發付アリタルヿヲ證ス

（第三百二十五條　官廳ニ於テ又ハ公證ヲ為ス

人ノ面前ニ於テ為シタル陳述ニ付キ證書カ作ラレタル片ハ其證書ハ記載セラレタル情況ヲ證ス

（第三百二十六條　官廳又ハ公證ヲ為ス人ノ作リタル證書カ前二條ニ記載シタルヨリ他ノ事實ヲ證スル片ハ其證書ハ其事實ノ眞實ナルヿヲ證ス

然レ𪜈證據カ官廳又ハ公證ヲ為ス人ノ固有ノ實驗ニ基カサル片ハ證書ハ法律上ノ成規ニ依リ證據ノ効力ヲ固有ノ實驗ニ繋ラシメサル場合ニ限リ證據力ヲ有ス

（第三百二十七條　前二條ノ場合ニ於テ證書ニ其遵守ヲ證シタル方式カ實際遵守セラレサ

ルヿ又ハ官廳若クハ公證ヲ為ス人カ故意、錯誤若クハ其他ノ理由ニテ不正ニ記載ヲ為シタルヿヲ主張シタル片ハ其主張ニ付キ證據ヲ述ブルヿヲ許ス

第三百二十八條　第三百二十五條及ヒ第三百二十六條ノ場合ニ於テ證書ハ官廳若クハ公證ヲ為ス人ノ管轄違ナル為メ又ハ方式ニ欠缺アル為メ公證書タルノ効力ヲ有セサルモ私證書タルノ證據力ヲ有スルヿヲ妨ケラレス

第三百二十九條　私證書ハ其作成人署名捺印シタル限リハ權利行為ニ付キ之ニ記載シタル陳述ノ為メ完全ナル證據ヲ成ス

第三百三十條　私證書ニ記載セラレタル陳述カ權利行為ヲ包含セサル限リハ作成人自身、其相續人又ハ其他ノ承權人及ヒ第三者ニ對シ證據力ヲ有スヘキヤ否ヤ又其證據力ヲ有スルノ程度ハ其場合ノ情況ニ隨ヒ裁判所之ヲ判斷ス

第三百三十一條　證書ノ竄削、挿入、抹殺又ハ其他ノ表見上ノ欠缺カ證書ノ證據力ノ全部又ハ一分ヲ廢滅セシムルノ限度ハ裁判所其自由ナル心證ヲ以テ之ヲ裁判ス

第三百二十三十二條　原告被告ノ各方ハ[illegible]

書、携帯シ口頭辯論ノ[illegible]其所持スル證書[illegible]

[illegible]裁判所ノ命ニ因リ裁判所ニ提出[illegible]スルコトヲ要ス

立ツ

其提出ハ訴ヘニ之ヲ準備シ置クヘキ要ナ
擧證者カ證書ヲ提出セサルトキハ採證決定ヲ
以テ其提出ヲ命ス然レトモ擧證者カ其提出セ
サリシヿヲ充分ナル理由ヲ以テ辨解セサル
トキハ新ニ定メラルヘキ期日ノ費用ハ擧證者
ノ負擔ニ歸ス
擧證者カ證書ヲ新期日ニ於テモ亦提出セサ
ルトキハ第二百七十一條第二項ノ規定ヲ適用
ス

民事訴訟法草案

苐十七回

第三百三十三条　相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スルノ義務アリ
第一　舉証者カ民法ノ成規ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ訴者ニ請求シ又ハ其提出ヲ求メ得ル時
第二　証書カ其性質ニ因リ舉証者及ヒ相手方ニ共通ナル時
六月九日削

第三百三十三条　相手方其手中ニ存スル証書ニシテ訴訟ニ於テ舉証者又ハ引用シタルモノヲ提出スルノ義務アリ
其引用ハ準備書面ニ於テスルト又ハ口頭ニ於テスルトヲ問ハス

第三百三十三條　舉證者ハ其主張ニ係ル證書ヲ必要ナル證書ニシテ相手方ノ所持ニ係ル片ハ證書ノ申出ヲ且相手方ニ於テ其證書ヲ提出スルヿヲ命スヘキ旨ヲ申立テ又其主張ヲ疏明シタル片ハ裁判所ハ相手方ニ證書ノ提出ヲ命ス殊ニ必要ナル場合ニ於テハ採證決定ヲ以テ之ヲ命スルヿヲ要ス

證書カ

第三百三十四條　相手方カ證書ヲ所持セサルヿヲ申立ツル片ハ此申立カ眞實ニ基クヤ否ヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クルノ目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヲ穿鑿スル爲メ此章ノ第九節

甲之一

第三百廿四条 申立ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ
第一 証書ノ表示
第二 証書ニ因リ証スヘキ事実ノ表示
第三 証書ノ包有事項ノ表示
第四 証書カ相手方ノ手中ニ存スルヿヲ主張スル理由及ヒ状況[illegible]
第五 証書ヲ提出スヘキ義務ノ生スル理由ノ表示
第三百廿五条 裁判所ハ証書ニ因リ証スヘキ事実ノ重要ナルヿ且ツ申立ヲ理由アリト認ムル場合ニ於テ相手方其証書ノ手中ニ存スルヿヲ自認スル時又ハ申立ニ付キ陳述セサル時ハ挙証決定ヲ以テ証書ノ提出ヲ命ス

ノ成規ニ従ヒ相手方本人ヲ~~證人トシテ~~訊問スルヿヲ要ス

但割リ區別ト実気也

相手方カ官廳ナルキハ證書カ其廳ノ保藏ニ係ラス又其所在ヲ明示スルヿヲ得サル旨ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ代用ス裁判所ハ此證明書ヲ差出サシムル為メ相當ノ期間ヲ定ムルヿヲ要ス

第三百二〈二〉十五〈七〉條 證書ヲ所持スルヿヲ自認シ又ハ之ヲ所持セスト申立テサル相手方カ其證書ヲ提出スヘキノ命ニ従ハス又ハ相手方カ所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問ニ對シテ~~證人トシテ~~ノ供述スルヿヲ拒ミタルキ又ハ擧證者ノ使用ヲ妨クルノ目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヿノ明確ナルキハ擧證者カ證書ノ謄本ヲ差出シタル場合ニ於テハ此謄本ヲ正當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差出サヽルキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ包有事項ニ付テノ擧證者ノ主張ヲ正當ト認ムルヿヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ差出サヽルキハ~~訴訟人~~相手方タル官廳ニ對シ右ト同一ノ結果ヲ生ス

削

第三百三十六條 擧證者カ擧證ノ為メ必要ナル證書ノ第三者ノ所持ニ係ルヿヲ主張シ且第三者ヲシテ證書ヲ提出セシムルヿノ申立ヲ為シテ其主張ヲ疏明シタルキハ採證決定

○第三百廿八条 證書ノ挙証者ノ主張ニ依レハ第三者ノ手中ニ在ルトキハ訟務ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル為メノ期日ヲ定ムルコト申立テヘ之ヲ為ス

○第三百廿九条 第三者ハ挙証者相手方ニ於ケル同一理由ニ因リ證書ヲ提出スル義務アリ判決強テ之ヲ提出セシムル時ハ訴ヲ以テスルニアラサレハ為スコトヲ得ス

○第三百三十条 第三百廿八条ニ依リ提出スヘキ申立ヲ辯明スルニハ第三百卅三条ノ規定

ヲ以テ第三者ニ證書ノ提出ヲ命スルコトヲ要ス

第三百三十七條 第三者ノ呼出状ニハ左ノ諸件ヲ掲ク

第一 第三者及ヒ原告被告ノ氏名身分職業并ニ住所ノ表示

第二 採證決定ノ包有事項ニ從ヒ證書ヲ以テ證セラルヘキ事實及ヒ證書ノ表示

第三 法律ニ依リ戒示セラレタル罰ヲ避ケント欲セハ證書提出ノ爲メ又ハ其所持ニ付キ證據ヲ述フル爲メ場所年月日及ヒ時ヲ以テ表示セラルヘキ期日ニ出頭スヘキ旨ノ指示

第三百[illegible]条 但シ證書カ[illegible]他人ノ手中ニ存スルコトヲ疏明スルヲ要ス

要件ヲ踐ミ[illegible]要ス

第三百

○第三百三十三条 證書ニ因リ證スヘキ事実及要件ナシトノ且其申立カ前案ノ裁決ニ適スル片ハ裁判所ハ證書提出ノ期間ヲ定メハ一ノ命令ヲ出セス第三者ニ對スル訴訟ノ完結ニ至ル片又ハ挙証者カ訴訟ノ進起訴訟ノ継續又ハ強制執行ヲ遅延シタル片ハ相手方ハ前項ノ期間満了ナシ訴訟手續ノ継續ヲ申立ルコトヲ得

○第三百三十三条 挙証者ノ主張ニ[illegible]又ハ公吏ノ手中ニ存スル片ハ證拠ノ申出ハ證書ノ送付

[illegible]裁判所ノ名稱

其他ノ訴訟手續ハ人證ニ付テノ成規ニ從フ

第三百三十八條 官廳及ヒ官吏ニハ前二條ノ規定ヲ適用セス

舉證者ニ於テ舉證ノ爲メ要用ナル證書カ官廳又ハ官吏ノ保藏ニ係ルコトヲ主張シ其主張ヲ疏明シタルトキハ裁判所ハ採證決定ニ基キ證書其謄本又ハ其包有事項ノ拔書ヲ送致スルコトヲ其官廳又ハ官吏ニ囑託ス

第三百三十九條 口頭辯論ノ際證書ヲ提出スルニ於テハ其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ其他ノ顯著ナル障碍アルトキハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出スルコトヲ命スルコト

公廳ヨリハ公吏ニ嘱託アランヿ
ヲ申立ツハ之ヲ要ス
此規ハ[illegible]被告カ法律ノ
規ニ従ヒ裁判ノ効力ナリ
シテ取寄スルヿヲ得ト
記書ニ[illegible]ハ之ヲ適用
セス
公廳又ハ公吏第三百廿三條
奉ニ証書ヲ提出スル義務ア
ル場合ニ於テ之ヲ送付スルヿ
ヲ拒ム片ハ第三百廿五條乃至
第三百廿七條ノ規定
ヲ適用ス
第三百三十三條 訴訟決定ヲ為シ
タル後其決定中ニ掲ケタル係
争事実ニ付第三百廿八條第三百
三十三條ニ従ヒ[illegible]提出スル
ル場合今[illegible]ノ証書ヲ取寄スル
為メ必要ナル手続ニ因リ
訴ノ完結ヲ遅延スルニ至ル
ヘキ旨裁判所ニ於テ[illegible]被

要ス

受命判事又ハ受託判事ハ證書ノ明細書及ヒ其謄本ヲ又證書ノ一分ノミ要用ナル片ハ第百二十八條第二項ノ成規ニ従ヒ作リタル抜書ヲ調書ノ附録トシテ之ニ添附スルヿヲ要ス

三百四十五條 公證書ハ正本又ハ認證セラレタル謄本ヲ以テ之ヲ提出スルヿヲ得然レ氏裁判所ハ擧證者ニ正本ヲ提出スヘキヿヲ命スルヿヲ得

私證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出スルヿヲ要ス若シ原告被告カ未タ提出セサル原本ノ眞正ニ付キ一致シ又ハ證書ノ効力又ハ其解釋ニ

先カ訴訟ヲ遅延スルノ故
意ヲ以テ又ハ甚シキ
怠慢ニ因リ[illegible]ヲ受ケ
早ク申出テサリシヿ心
証ヲ得タル片ハ申立ニ因リ
其[illegible]ノ申出ヲ却下
スルヿヲ得

付キ争ヲ為ス片ハ其謄本ヲ以テ足ル然レ氏裁判所ハ此場合ニ於テモ擧證者ニ原本又ハ提出スヘキヿヲ職権ヲ以テ命スルヿヲ得

提出シタル謄本ニ代ヘテ正本又ハ原本ヲ提出スヘキノ命ニ従ハサル片ハ裁判所ハ如何ナル證拠力ヲ謄本ニ付スヘキヤヲ自由ナル心證ヲ以テ裁判ス

第三百四十六條 擧證者ハ證書ヲ提出シタル後相手方ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ此擧證方法ヲ抛棄スルヿヲ得ス

削

第三百四十二條 方式及ヒ包有事項ニ因リ公證書トシテ顯ハル、證書ハ眞正ナリト推定セラル但反證ハ之ヲ許ス

○第三百三十七條公證書又ハ檢眞ヲ經タル私證書カ僞造又ハ若クハ變造セラレタルモノナリト主張スル若ハ其證書ノ眞否ニ付キ疑アランヿヲ申立ツルヿヲ要ス、ハ此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ヲ爭中間判決ヲ以テ裁判スルヿヲ要ス

第三百四十二條削

裁判所ハ證書ノ眞正ナルヿヲ疑フキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證書ニ署名捺印シタル官廳又ハ公證ヲ爲ス人ヲシテ其眞正ナルヿニ付キ陳述ヲ爲サシムルヿヲ得

裁判所ハ外國ニ於テ作リタル證書ニシテ公證書ト稱スルモノヲ詳細ナル證明ナクシテ眞正ト認ムヘキヤ否ヤヲ其場合ノ情況ニ隨ヒ判定スルヿヲ要ス然レトモ外國駐剳ノ本邦ノ公使又ハ領事ノ保證アルキハ其證書ノ眞正ナルヿノ確實ト看做サル

第三百四十八條私證書ノ眞正ナルヿニ付キ爭アルキハ裁判所ハ擧證者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スヿヲ得

~~第三百四十三條 相手方ノ承認セサル私證書ノ眞正ナルヿハ之ヲ證スルヿヲ要ス然レトモ成人ノ署名捺印ノ眞正ナルヿカ確實ナルキハ署名捺印ノ前ニ存スル記載ハ眞正ナリト推定セラル~~但反證ハ之ヲ許ス

第三百四十九條 私證書ノ眞否ハ總テノ適法ノ擧證方法及ヒ筆跡若クハ印章ノ對照ニ因テ之ヲ擧ルヿヲ得

筆跡若クハ印章ヲ對照スル爲メ證書ノ眞否ノ證ヲ擧クル原告又ハ被告ハ適當ノ書類ヲ提出スルヿヲ要ス

壹

眞正ナルヿカ自認セラレ又ハ證セラレタル適當ノ對照書類ナキキハ其手書ヲ爲スヘキ原告又ハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ定マリタル語辭ヲ書セシムルヿヲ命スルヿヲ得其書シタル語辭ハ調書ノ附錄トシテ之ニ添附ス

ルヿヲ要ス

裁判所ハ手書對照ノ結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ又適當トスル場合ニハ鑑定人ヲ審訊シタル後裁判ス

原告又ハ被告カ對照スヘキ語辭ヲ書スヘキ裁判所ノ命ニ十分ナル辯解ナクシテ從ハサルトキ又ハ書樣ヲ變シテ手書ヲ爲シタルトキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ確實ナリト看做サル

第三百四十五條　證書ニシテ何人ニテモ其筆跡又ハ署名捺印ノ眞否ヲ最早識別スルヿ能ハサル程古キモノハ裁判所自由ナル心證ヲ以テ之ヲ眞正ト認ムルヿヲ得

第三百四十六條　提出セラレタル證書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當トスル場合ニハ其謄本ヲ記錄ニ留メテ之ヲ還付ス

然レトモ證書ヲ僞造又ハ變造ナリトシテ爭ハレタルトキハ檢事局ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ還付スルヿヲ得ス

第三百四十七條　公證書ノ眞正ナラサルヿ又ハ其變造若クハ僞造ナルヿヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告又ハ被告ニハ其惡意若クハ重過失ノ責アルトキハ五十圓以下ノ過料ヲ科ス

又私證書ノ眞正ナルヿヲ眞實ニ反キテ爭フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下

甲之十二

ノ~~過料~~罰金ヲ~~科ス~~言渡

第三百四十~~七~~六條　此節ノ規定ハ事件ノ本性カ
許ス限リハ其他事跡ノ記念又ハ權利ノ證徴
ノ爲メ作リタル割符界標等ノ如キ~~記念物ニ~~モノ
モ之ヲ準用ス

第三百四十三条 檢證ノ申出ハ
檢證物ヲ表示シ及ヒ
檢證ニつキ證スヘキ事実ヲ
明示シテ之ヲ爲ス

削

第~~七~~八節　檢證ニ因ル證據

第三百四十七條　申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ
決定シタル檢證ハ其檢證スヘキ物ヲ訟庭又
ハ裁判所内ニ搬致シ得ヘキ片ハ受訴裁判所
カ口頭辯論ノ際之ヲ爲ス

其物カ不動産ナル片又ハ動産ニシテ裁判所
内ニ之ヲ搬致スルヿヲ得ス若クハ其搬致カ
不相應ノ時日若クハ費用ヲ要スヘキ片ハ其
所在地ニ就キ檢證ヲ爲スヿヲ受訴裁判所ノ
判事又ハ區裁判所ニ委任ス

檢證セラルヘキ物カ受訴裁判所ノ所在地ニ
在ル片ハ受訴裁判所ノ全員カ其物ノ所在地
ニ臨ムヿヲ得

乙ノ一

第三百~~五十~~四十四條　受訴裁判所ハ檢證ヲ為スニ際シ鑑定人ヲ立會ハシムヘキヿヲ命スルヿヲ得此場合ニ於テハ此章第五節ノ規定ヲ適用ス
「受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ区裁判所ニ嘱託スルヿヲ得」

別
第三百五十一條　檢證物ヲ準備シ置クヘキ擧證者ノ義務及ヒ擧證者カ相手方又ハ第三者ニ於テ檢證物ヲ所持スルヿヲ主張シタル片其檢證物ヲ出示スヘキ相手方又ハ第三者ノ義務ニ付テハ第三百三十二條以下ノ規定ヲ準用ス

第三百~~五十二~~四十五條　檢證ヲ為スノ際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ニシ又必要トスル場合ニハ調書ノ附録トシテ添附スヘキ圖面ニ因リ之ヲ明確ニスルヿヲ要ス若シ圖面ヲ既ニ記録中ニ存スル片ハ檢證物ト之ヲ對照シ必要トスル場合ニハ之ヲ更正スルヿヲ要ス

仍之

第九節　原告被告ヲ證人トシテ訊問スルヿニ因ル證據

第三百~~五十三~~四十六條　裁判所ハ爲メ要用ナル係爭事實ニ付テノ證據ハ原告被告ヲ證人トシテ訊問スルヿニ因テモ亦之ヲ擧クルヿヲ得然レトモ此擧證ハ原告被告ノ其他ニ供出シタル適法ノ證ニ依ルモ其結果カ證スヘキ事實ノ眞否ニ付キ裁判所ノ心證ヲ生セシムルニ足ラサル片~~ニ限リ第三百三十一條第二項第三項~~
ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告又ハ被告ノ本人ヲ訊問スルヿヲ得

~~十二條第三項及ヒ第三百三十四條ノ規定ヲ留保シテ申立ニ因リ之ヲ許シ又ハ職權ヲ以テ之ヲ決定スルコトヲ得~~

仏例

（第三百五十四條　原告被告ヲ證人トシテ訊問スルコトニ因リ心證ニハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ人證ニ付テノ成規ヲ準用ス

第三百四十七條　裁判所ハ原告又ハ被告ヲ證人トシテ訊問スルコトヲ決定シ且原告又ハ被告自身カ其決定ノ言渡ノ際在廷ナルトキハ其訊問ヲ直チニ爲スヲ通例トス原告又ハ被告自身カ在席ナラサルトキハ檢證決定ノ已有事項ニ因リ訊問ヲ爲スヘキ事實ヲ

第三百四十八條訊問ヲ受ルニ付キ原告若クハ被告ヘ送達ノ端書又ハ其他覺書ヲ用ユルコトナカラシテ參酌ス可シ

（修正之）

仏例

（第一通知シテ新期日ニ之ヲ呼出ス

第三百五十六條　第二百九十條又ヒ第二百九十一條第二號乃至第五號ノ規定ハ原告被告ヲ證人トシテ訊問スルノ際ニ之ヲ適用セス

（第三百五十七條　異アル事實ニ付キ擧證ノ義務アル原告又ハ被告ハ最初ニ證人トシテ之ヲ訊問スルヲ通例トス然レトモ原告被告ヨリ一致シテ申立ツルトキ又ハ眞實ヲ探知スル爲メ要用トスルトキハ最初ニ相手方ヲ訊問スルコトヲ得

（第三百五十八條　原告被告ノ各方ハ第三百六十一條第二項ノ規定ヲ留保シテ相手方ノ訊問後ニ已レモ亦證人トシテ訊問ヲ受クルコトヲ

求ムルヿヲ得

原告又ハ被告ヲ訊問シタル後裁判所ノ心證ニ於テ最初ニ爲シタル訊問ニテハ其證スヘキ事實カ十分確實ナラストスル片ハ職權ヲ以テモ亦相手方ノ訊問ヲ決定スルヿヲ得

仍之 (第三百五十九條 擧證ノ義務アル原告又ハ被告カ證據ヲ述フルヿヲ拒ミ且其拒絶カ至當トセラレタル片ハ裁判所ハ原告被告ヲ證人トシテ訊問スルヿニ因リ擧證ヲ全ク許サスト又ハ相手方ノミヲ訊問スヘキヤヲ其場合ノ情況ニ隨ヒ判定ス

裁判所カ擧證ノ義務アル原告又ハ被告ニ於テ爭アル事實ヲ知リ得サリシヿノ心證ヲ得タル時ハ亦右ニ同シ

仝 (第三百六十條 證人トシテ訊問セラルヘキ原告又ハ被告ニハ爾後證人タルノ資格ニテ供述スヘク其僞證ノ場合ニ於テハ刑事上訴追セラルヘキヿヲ宣誓前ニ明告スルヿヲ要ス

三 (第三百六十一條 原告又ハ被告ハ證人トシテ訊問ヲ受クル前ニ宣誓スルヿヲ要ス

然シモ裁判所カ原告又ハ被告ヲ宣誓セシメテ訊問シタル後相手方ヲモ亦證人トシテ訊問スルヿヲ決定シタルキハ訊問ノ終結スルマテ相手方ノ宣誓ヲ止メ且其爲シタル供述カ全ク不信實ナルヿノ顯ハルヽ場合ニ於テハ其宣誓ヲ爲サシメサルヿヲ得

收初返

第三百四十九條　原告若クハ被告ヨリ證人トシテ裁判所ニ出頭セシムル爲メ又ハ之ヲシテ證據ヲ述ヘシムル爲メ過料ヲ言渡シ又ハ本人ヲ引致スルコトハ之ヲ許サス

原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ證據ヲ供述スルヲ拒ミ又ハ證人トシテ訊問セラル爲メ定メタル期日ニ出頭セサル片ハ裁判所ハ其意見ヲ以テ宣誓メ上メ訊問ニ因テ舉證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ト認ムルコトヲ得

第三百五十五條　訴訟無能力者ノ法律上代人カ爭訟ヲ爲ス片ハ法律上メ代人若クハ既ニ滿十六歳ト爲リタル[illegible]者ニ限リ訴訟無能力者ヲ證人トシテ訊問スヘキヤ又ハ此両人ヲ證人トシテ訊問スヘキヤヲ決定スルハ裁判所ノ意見ニ任カスル

削

國、府縣、郡區、町村、社寺又ハ社團カ訴訟人ナル片ハ第三百五十三條乃至第三百六十二條ノ規定ヲ適用セス此ノ如キ訴訟人ノ法律上代人ニ因レル舉證ハ人證ニ付テノ成規ニ從フ

法律上代人數人アル片ハ其一人ヲ訊問スヘキヤ又ハ數人ヲ訊問スヘキヤヲ決定スルハ亦前項ニ同シ

六月十八日校了

乙八

乙ノ九

四月廿

書記

民事訴訟法草案

第十八回

第七節　證據ノ保全

第三百六十四條　擧證ノ方法ヲ失ヒ又ハ將來之ヲ使用シ難カルヘキ恐アル者ハ爭訟ノ經過中ト雖モ其起始前ナリトモ問ハス申立ニ因リテ證據保全ノ爲メ證人若クハ鑑定人ヲ訊問シ又ハ檢證ヲ爲スコトヲ得

第三百六十五條　爭訟カ既ニ繫屬ト爲リタルトキハ其申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス丁ヲ要ス

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ其訊問セラルヘキ者ノ現在地又ハ檢證セラルヘキ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲ス丁ヲ得

~~在ノ區裁判所~~ 爭訟カ未タ繫屬ト爲ラサル

キハ專屬管轄ヲ有ス（訴訟記載シテ已ニ裁判所ニ繫屬中ニ在ルトキハ其裁判所ニ申請ヲ為スヿヲ要ス）

~~其~~申請ハ書面又ハ口頭ニテ之ヲ為スヿヲ得（口頭ニテ為ス場合ニ於テハ裁判所書記之ヲ調書ニ記載ス）

第三百五十三條 申請ハ左ノ諸件ヲ包含スルヿヲ要ス

第一 相手方ノ氏名、身分、職業及ヒ住所ノ表示

第二 採證ス可キ事實ノ表示

第三 舉證方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問スヘキトキハ其氏名、身分、職業及ヒ住所ノ表示

第四 舉證方法ヲ失ヒ又ハ將來之ヲ使用シ難カルヘキ恐アルトキハ其理由ノ表明但其理由ハ疏明スルヿヲ要ス

第三百五十四條 申請ニ付テハ豫メ口頭辯論ヲ經スシテ決定ヲ為スヿヲ得

申請ヲ許容スル決定ニハ採證ス可キ事實及ヒ證人若クハ鑑定人ヲ揭ケ且採證ノ期日ヲ定ム

第三百五十五條 採證ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定ニ申立人ノ申請書ノ謄本ヲ送達シテ相手方ヲモ其權利防衛ノ為メ呼出スヿヲ要ス

切迫ナル危險ノ場合ニ於テ相手方ノ呼出ヲ適當ナル時間ニ為スヿヲ得サルトキト雖モ採證ハ此カ為メ妨ケラレス

申請ヲ許容シタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヿヲ得ス

別

第三百五十六條 採證ハ此章ノ第五節、第六節及ヒ第七節ノ成規ニ從ヒ之ヲ為ス

採證ニ付テノ調書ハ採證ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ貯藏スルヿヲ要ス
原告被告ノ各方ハ證據審問書ヲ許訟ニ於テ用ユルノ權利ヲ有ス
受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ採證ヲ命シ又ハ既ニ採リタル證據ノ補充ヲ命スルヿヲ得

第三百~~六~~四十~~六~~七條　採證ハ第三百~~六~~四十~~四~~七條ノ條件ナキ片ト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スヿヲ得

第三百~~七~~五十八條　申立人カ相手方ヲ指定セサル片ハ申立人自己ノ過愆ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサルヿヲ疏明スル場合ニ限リ其申請ヲ許ス
申請カ許容セ~~ラレ~~タル片ハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防衛ノ為メ臨時代人ヲ任スルヿヲ得

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第四百十九條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ハ區裁判所ノ構成ヨリ生スル當然差異ヲ生セス又ハ此節ニ於テ別段ノ成規ヲ設ケサルトキニ限リ[illegible]地方裁判所ノ訴訟手續ノ成規ヲ適用ス

第四百二十條 訴及ヒ總テ其他ノ申請届出陳述又ハ論辯ハ書面若クハ口頭ニテ之ヲ提出スルコトヲ得

第四百二十一條 訴ヲ起シタルトキハ直チニ口頭答辯及ヒ其他ノ口頭辯論ノ爲メ期日ヲ定ム但争訟ノ開始ニ對シ障礙アルトキハ此限ニ在

裁判所書記ハ訴状ノ副本又ハ調書ノ謄本ヲ
被告ニ送達セシム
準備書面ノ交換ハ之ヲ要セス

第三百十七條　原告被告ハ豫メ通知スルニ非サレハ相手方ニ於テ恐クハ陳述ヲ為シ得サルヘキ申立及ヒ事實上ノ主張ヲ口頭辯論ノ前ニ相手方ニ通知スルヿヲ得其通知ハ特別ノ方式ニ依ラスシテ口頭又ハ書簡ヲ以テ一方ヨリ他ノ一方ニ之ヲ為スヿヲ得然レ𪜈原告被告ハ相手方ニ送達スル為メ其申立及ヒ主張ヲ書面ヲ以テ裁判所ニ提出シ又ハ裁判所ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ陳述スルヿヲ得

第三百十八條　呼出期間ハ（口頭辯論ノ期日ト訴状送達トノ間ニ少ナリモ三日ノ猶豫）急迫ナル場合ニ於テハ期間ヲ二十四時間マテニ短縮スルヿヲ得送達カ外國ニ於テ為サルヘキ片ハ期間ハ情況ニ應シテ之ヲ定ムルヿヲ要ス

第三百十九條　原告被告ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ争訟ノ辯論ヲ為ス為メ裁判所ニ出頭スルヿヲ得此場合ニ於テハ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ成ル

第三百二十條　数箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ同時ニ且本事件ノ辯論前ニ提出スヘキノ規定ハ裁判所ノ管轄違ノ抗辯カ本事件ニ付テノ被告

ノ~~辯論前ニ主張セラレ、片~~ニ限リ之ヲ適用ス

被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本事件ノ辯論ヲ拒ムノ權利ナシ然レモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ右ノ抗辯ニ付キ分離シテ辯論ヲ為スヘキヿヲ命スルヿヲ得

第三百六十六條、第三百廿二條ノ規定ハ已ニ為シタルノ訴訟手續ニ之ヲ適用セス

第四百二十三條　地方裁判所ノ管轄ニ屬スル請求カ反訴ニ因テ起サレタル片ハ相手方ヨリ本事件ニ付キ尚ホ辯論ヲ為スノ前ニ申立テタル場合ニ限リ區裁判所ハ爭訟ヲ地方裁判所ニ移送スルヿヲ要ス—訴ノ申立ノ擴張ニ因リ其訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト為リタル片モ亦右ニ

同ニ

~~第四百廿七條~~ [illegible]

原告又ハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ隨ヒ爭訟關係ヲ十分明確ニスル為メ必要ナルモノニ限リ訟庭調書ヲ以テ之ヲ明確ニスルヿヲ要ス

削

自認、認諾、抛棄及ヒ和解ハ調書ヲ以テ之ヲ明確ニスルヿヲ要ス

削

調書ハ區裁判所判事及ヒ裁判所書記之ヲ檢認スルヿヲ要ス區裁判所判事差支アル場合ニ於テハ裁判所書記ノ檢認ヲ以テ足ル

第三百七十八條　訴ヲ起サントスル者ハ和解試ムル為メ訴訟ノ目的物ヲ明示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出スヿヲ申立ツルヿヲ得其申立ハ書面ヲ以テシ又ハ書記ニ口述シテ其調書ヲ作ラシメテ之ヲ為スヿヲ得

當事者双方出頭シ和解カ調ヒタルトキハ之ヲ調書ニ記シ明確ニスルコトヲ要ス

和解カ調ハサルトキハ當事者双方ノ申立ニ因リ其爭訟ヲ直チニ辯論ス此場合ニ於テハ訴ノ提起ハ和解ノ申立ト共ニ之ヲ爲シタルモノト看做ス

相手方カ出頭セス又ハ和解調ハサルトキハ之ヲ申立人ニ通知スヘシ生シタル費用ハ爭訟ノ費用ノ一分ト看做ス

第二節　督促手續

第四百六十九條　通常ノ訴訟手續ニ於テ訴追スルトキ請求ニ一定ノ金額ノ支拂又ハ其他ノ代補物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル場合ニ於テハ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラスシテ訴ヲ提起セスシテ督促手續ニ由リ條件付ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發スルコトヲ其地管轄ノ區裁判所ニ申立ツルコトヲ得

申請ノ包有事項ニ從ヒ請求ノ主張カ未タ爲サヽサル反對給付ニ繫ルキ又ハ支拂命令書ノ送達カ外國ニ於テ若クハ公示送達ニ因テ爲サルヘキ件ハ督促手續ニ依ルコトヲ許サス

二百四十五再調

第三百七十条　支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス此命令ハ區裁判所ノ其一審ノ物ニ付テノ管轄カ制限セラ

六日廿三日稿了

シサリシモノト看做シ通常ノ訴訟ヲ提起シタル者ハ訴ノ提起ニ付キ普通

裁判所又ハ地方裁判所ノ屬スル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス乙三

第四百二十六條　支拂命令ヲ發スルヿノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ提出スルヿヲ得

其申請ハ左ノ諸件ヲ包含スルヿヲ要ス

第一　請求ノ數額若クハ其目的物ノ明示及ヒ其原由ノ表示又請求カ數項ヨリ成ルトキハ其各項ノ數額若クハ其目的物及ヒ原由

第二　支拂命令ヲ發スルヿノ申立

第四百二十七條　裁判所ハ申請ヲ實質上調査シ其申請カ前二條ノ規定ニ適當セス又ハ申請者ノ明示ニ因リ請求カ總テ若クハ現時理由ナキヿノ顯ハルヽトキハ其申請ヲ却下ス

支拂命令カ請求ノ一分ノミニ付キ發スルヿヲ得サルトキハ亦却下ヲ為スヿヲ要ス然レ𪜈數箇ノ請求中或ルモノカ理由ナクシテ其他ノモノカ理由アリト見エルトキハ其理由アリト見エルモノニ付キ申請ヲ許容ス

却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヿヲ得ス然レ𪜈債權者ハ督促手續ニ適セスト認メラレタル請求ヲ通常ノ訴訟手續ニ於テ追行スルヿヲ得

第四百二十八條　支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊スルヿ無クシテ之ヲ發ス

支拂命令ハ第四百二十六條第一號ニ掲ケタル申請ノ要件ト即時ノ强制執行ヲ避ケント欲セハ送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求及ヒ數額ヲ以テ表示セラルヘキ其手續ノ費

乙ノ三

用ヲ債權者ニ辨償スヘク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツヘキヿノ債務者ヘノ命令トヲ包含ス

第四百二十九條　權利拘束ノ效力ハ支拂命令書ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル

第四百三十條　異議ヲ申立ツルニハ債務者カ支拂命令ニ對シ異議ヲ申立ツルヿヲ書面又ハ口頭ニテ陳述スルヲ以テ足ル但其理由ノ明示ハ之ヲ要セス

第四百三十一條　債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ申立ツル片ハ支拂命令ハ其效力ヲ失ヒ權利拘束ノ效力ハ存續ス然レ𪜈異議カ特ニ數箇ノ請求中ノ一

或ルモノヽミニ對シ申立テラルヽ片ハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相當スル費用ノ部分ニ付キ效力ヲ存ス

事件カ區裁判所ニ屬スル片ハ口頭辯論ノ期日ハ第四百十八條及ヒ第四百二十條ノ規定ニ從ヒ之ヲ定ム其然ラサル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタルヿヲ債權者ニ通知スルヿヲ要ス

債權者ハ右最後ノ場合ニ於テ通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シテ一个月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起スヿヲ要ス若シ之ニ違フ片ハ權利拘束ノ效力ハ消滅ス

第四百三十二條　督促手續ノ費用ハ適當ナル

時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ發生スヘキ爭訟ノ費用ノ一分ト看做サル

第四百三十三條　債務者カ法律上ノ期間内ニ於テ異議ヲ申立テサル𪜈ハ支拂命令ハ確定シタル闕席判決ノ效力ヲ得

債權者ニハ異議ノ申立ナキヿヲ通知スルヿヲ要ス債權者カ通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シテ三个月ノ期間内ニ支拂命令書ノ執行カアル正本ヲ求メサル𪜈ハ支拂命令ハ權利拘束ノ效力ノ消滅ト共ニ其效力ヲ失フ

第四百三十四條　時期ニ後レテ申立テラレタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

却下ノ命令ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告ヲ爲スヿヲ得

第四百三十五條　異議ノ期間ヲ懈怠シタル債務者ハ左ノ場合ニ於テ七日ノ期間内ニ非常異議ヲ申立ツルノ權アリ

第一　債務者カ天災又ハ其他避クヘカラサル事變ニ因リ法律上ノ期間内ニ異議ヲ申立ツルヿヲ妨ケラレタル𪜈

第二　債務者カ其過怠ニ非スシテ支拂命令書ノ送達ヲ知ラサリシ𪜈

非常異議ニハ第四百十三條乃至第四百十五條ノ規定ヲ準用ス

第四百三十六條　支拂命令ヲ發スルヿノ申請及ヒ異議ノ申立ハ謄本ヲ以テ相手方ニ之ヲ

通知スルヿヲ要セス

第四百三十七條　債權者ノ為メ支拂命令ヲ發スルヿヲ求メ又ハ債務者ノ為メ支拂命令ニ對シ異議ヲ申立ツル第三者ハ其委任ヲ證スルヿヲ要セス

第三節　和解手續

第四百三十八條　地方裁判所又ハ區裁判所ニ訴カ起サレス又督促手續ニ於テ支拂命令ヲ發スルヿカ申立テラレサル間ハ原告被告ノ各方ハ其地管轄ノ區裁判所ニ和解ノ試ヲ申立ツルノ權利ヲ有ス

五九

五月四日配付

民事訴訟法草案

第十九回

第四百三十九條　和解試ヲ為スヿノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ為スヿヲ得其謄本ハ相手方ニ付與スルヿヲ要セス

其申請ハ左ノ諸件ヲ包含スルヿヲ要ス

第一　原告被告ノ氏名、身分、職業及ヒ住所ノ表示

第二　爭訟物ノ明示

第四百四十條　和解試ノ為メノ原告被告ノ呼出状ニハ前條ニ掲ケタル申請ノ要件及ヒ期日ニ本人出頭スヘキヿノ催告ヲ掲ク

申請ヲ自ラ提出スル原告又ハ被告口頭ヲ以テ之ヲ呼出シ且其交付セラルヘキ呼出状ヲ相手方ニ送致スルヿヲ之ニ委任スルヿヲ得

第四百四十一條　原告被告ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ和解辯論ノ為メ裁判所ニ出頭スルヿヲ得

第四百四十二條　裁判所ハ和解辯論ニ於テ代人ヲ許サス但代人ヲ出シタル原告又ハ被告ノ出頭セサルヿカ充分ニ辯解セラルヽ片ハ此限ニ在ラス

第四百四十三條　裁判所ハ原告被告雙方ノ申立ニ因リ證人及ヒ鑑定人ヲ訊問シ又ハ檢證ヲ為スヿヲ得

第四百四十四條　和解カ調ヒタル片ハ調書ヲ以テ之ヲ明確ニスルヿヲ要ス

原告被告ノ一方カ出頭セサル片又ハ和解試カ調ハサル片ハ其事ノミヲ調書ニ記スルヿヲ要ス

第四百四十五條　原告被告ノ一方カ出頭セサル片又ハ和解試カ調ハサル片ハ和解試ノ費用ハ發生スヘキ爭訟ノ費用ノ一分ト看做サル

第五編　上訴

第一章　控訴

第四百四十六條　控訴ハ區裁判所及ヒ地方裁判所ノ第一審ニテ發シタル判決ニ對シ之ヲ為スヿヲ得

闕席判決ヲ受ケタル原告又ハ被告ハ故障ヵ許サレス且闕席ノ場合存セサリシヿヲ以テ控訴ノ理由トスルトキニ限リ闕席判決ニ對シ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルヿヲ得

第四百四十七條　控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ナキニ拘ハラス之ヲ取下クルヿヲ得

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スルノ結果ヲ生

ス

第四百四十八條　原告被告ハ定マリタル争訟ノ為メ控訴ヲ為サヽルノ契約ヲ為スヿヲ得其契約ハ不服申立ヲ免カルヘキ裁判ヲ為ス裁判所ニ於テ口頭辯論ノ際調書ニ之ヲ口述シ又ハ判決ヲ發スル前若クハ其後ニ書面ヲ以テ之ヲ取結フヿヲ得

第四百四十九條　控訴期間ハ一ヶ月トシ判決書ノ送達ヲ以テ始マル但判決書送達前ノ控訴ノ提起ハ無効タリ

若シ控訴期間内ニ於テ判決カ第三百八十九條ノ規定ニ從ヒ追加裁判ヲ以テ補充セラレタルトキハ控訴期間ノ經過ハ最初ニ為サレタル判決ニ對スル控訴ニ付テモ追加裁判書ノ送達ヲ以テ更ニ始マル

第四百五十條　控訴ノ提起ハ控訴状ヲ管轄控訴裁判所ニ差出スニ因テ之ヲ為ス

第四百五十一條　控訴状ハ準備書面ニ付テノ普通規定ニ從ヒ之ヲ作リ且左ノ諸件ヲ掲クルヿヲ要ス

第一　控訴ヲ受クル判決ノ表示

第二　其判決ニ對シ控訴ヲ起サル、ヿノ陳述

第三　判決ニ對シ不服カ申立テラル、程度ニ付キ定マリタル陳述及ヒ不服ノ理由

第四　主張スヘキ新ナル事實及ヒ擧證方法

六月廿三日讀了

ノ明示

第五　定マリタル申立

然レ圧右第四號ニ掲ケタル要件ノ欠缺ハ控訴提起ノ効力ニ影響ヲ及ホサス

第四百五十二條　控訴ノ提起ハ原告又ハ被告ヨリ第一審裁判所ニ之ヲ届出ツル丁ヲ要ス」裁判所書記ハ届書ヲ受取リタル後控訴人ノ費用ヲ以テ記録ヲ控訴裁判所ニ差出ス丁ヲ要ス

第四百五十三條　許スヘカラサル丁ノ判然ナル控訴又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起サレサル控訴ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

却下ノ命令ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告ヲ為ス丁ヲ得

第四百五十四條　前條ノ場合ノ外控訴状ノ副本ハ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スヘキノ催告ヲ以テ之ヲ被控訴人ニ送達ス但廣濶ナル事件又ハ錯雜ナル事件ニ於テハ期間ヲ相當ニ伸長スル丁ヲ得

第四百五十五條　答辯書ハ準備書面ニ付テノ普通規定ニ從ヒ之ヲ作リ且被控訴人ノ定マリタル申立及ヒ其主張スヘキ新ナル事實并ニ擧證方法ヲ掲クル丁ヲ要ス

第四百五十六條　被控訴人ハ答辯書ニ於テ控訴ニ從屬スル丁ヲ得

闕席判決ニ對シ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルヿニ付テノ規定ハ從屬ニ因テ闕席判決ニ對シ不服ヲ申立ツルヿニモ亦之ヲ適用ス

第四百五十七條　左ノ場合ニ於テハ從屬ハ其効力ヲ失フ

第一　控訴カ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却セラルヽ片

第二　控訴カ取下ケラルヽ片

被控訴人カ控訴期間内ニ控訴ニ從屬シタル片ハ其從屬ハ獨立ノ控訴ト看做サル

第四百五十八條　答辯書ニ新ナル事實若クハ擧證方法又ハ從屬スルヿノ陳述ヲ掲クル片ハ其副本ヲ控訴人ニ送達スルヿヲ要ス控訴人ハ七日ノ期間内ニ辯駁書ヲ差出スヿヲ得

第四百五十九條　口頭辯論ノ期日ハ書面交換ノ終リタル後之ヲ定ム

第四百六十條　原告被告ノ雙方ヨリ控訴カ起サレタル片ハ其兩控訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ為スヲ通例トス

第四百六十一條　闕席判決ヲ受ケタル原告又ハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障カ申立テラレ又相手方ヨリ控訴カ起サレタル片ハ控訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ故障完結スルマテ之ヲ中止ス

第四百六十二條　其他ノ訴訟手續ニハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ地方

裁判所ノ第一審訴訟手續ノ成規ヲ準用ス

第四百六十三條　控訴裁判所ニ在テハ爭訟ハ其申立テラレタル不服ニ因テ定マレル限界ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス

第四百六十四條　原告被告ハ其為サレタル申立ヲ領會セシムル為メ及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ正否ノ調査ノ為メ必要ナル限リハ口頭辯論ノ際第一審ノ辯論ノ結果ヲ演述スルヿヲ要ス

演述ノ不正又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ完備ヲ為サシメ又必要ナル場合ニハ辯論ヲ再開シテ之ヲ為サシムルヿヲ要ス

第四百六十五條　訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルトキト雖モ之ヲ許サス

第四百六十六條　妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ視察セラレサルモノニ限リ原告又ハ被告カ其過愆ニ非スシテ第一審ニ於テ之ヲ提出スル能ハサリシヿヲ疏明スル場合ニ於テノミ主張セラルヽヿヲ得

本事件ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムヿヲ得ス然レ𪜈裁判所ハ此ノ如キ抗辯ニ付キ分離シテ為スヘキ辯論ヲ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ命スルヿヲ得

第四百六十七條　原告被告ハ第一審ニ於テ主張セラレサリシ攻擊防禦ノ方法、事實及ヒ擧

證方法ヲ提出スルヿヲ得

第四百六十八條　新ナル請求ハ相殺セラルヘキモノニシテ且原告又ハ被告カ其過怠ニ非スシテ之ヲ第一審ニ於テ提出スル能ハサリシヿヲ疏明スルトキニ限リ第二百十四條第二號及ヒ第三號ノ規定ヲ留保シテ起スヿヲ得

相牽連セサル新ナル反對要求ハ相殺ノ爲メニモ亦控訴状又ハ答辯書ニ於テノミ之ヲ主張スルヿヲ得

反訴ノ提起ハ之ヲ許サス

五月十二日配付

秘

民事訴訟法草案

第二十回

第四百六十九條　事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲サヽリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ控訴審ニ於テ之ヲ追完スルヿヲ得

第四百七十條　第一審ニ於テ爲サレタル裁判上ノ自認ハ控訴審ニ於テモ亦其効力ヲ保存ス

第四百七十一條　控訴裁判所ハ控訴カ許サル可キモノタルヤ否又控訴カ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起サレタルヤ否ヲ職權ヲ以テ審査ス可シ若シ此要件ノ一カ缺クルトキハ判決ニ因リ控訴ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百七十二條　是認シ又ハ非認セラレタル請求ニ関スル争点ニシテ不服ノ申立ヲ受ケ

タルモノハ第一審ニ於テ此争点ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ為サヽリシ𪜈ト雖モ總テ控訴ニ於ケル辯論及ヒ裁判ノ事項タルモノトス

第四百七十三條　控訴裁判所ハ控訴ヲ理由アリトスル𪜈ニ限リ判決ヲ変更シテ事件ニ付キ裁判ヲ為ス可シ

第四百七十四條　控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ尚ホ辯論スルヿヲ必要トスル𪜈ハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第一　不服ノ申立ヲ受ケタル判決カ闕席判決ナル𪜈

第二　闕席判決ニ對スル故障又ハ非常故障カ不服ノ申立ヲ受ケタル判決ニ因リ不適法トシテ棄却セラレタル𪜈

第三　不服ノ申立ヲ受ケタル判決ニ因リ妨訴ノ抗辯ノミニ付キ裁判ヲ為シタル𪜈

第四　請求カ其基本及ヒ数額ニ付キ争ハレタル場合ニ於テ不服ノ申立ヲ受ケタル判決ニ因リ先ツ其基本ニ付キ裁判ヲ為シタル𪜈

第五　為替訴訟ニ於テ不服ノ申立ヲ受ケタル判決ニ因リ敗訴ノ被告ニ特別ノ訴訟ヲ以テ訴追ヲ為スノ抗辯權カ留保セラレタル𪜈

第四百七十五條　第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ重要ナル成規ニ乖戻シタル𪜈ハ控訴裁

判所ハ其判決及ヒ訴訟手續ヲモ廢棄シテ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スヿヲ得

第四百七十六條　控訴カ理由ナシトセラレタルトキハ判決ノ認可ヲ言渡ス可シ

第四百七十七條　判決ヲ控訴人ノ損害ニ變更スルヿハ相手方カ控訴又ハ從屬控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタルモノニ限リ之ヲ為スヿヲ得

第四百七十八條　控訴人カ口頭辯論ノ第一ノ期日ニ出頭セサルトキハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ關席判決ヲ以テ控訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第四百七十九條　出頭シタル控訴人カ口頭辯論ノ第一ノ期日ニ出頭セサル被控訴人ニ對シ關席判決アランヿヲ申立ツルトキハ控訴人ノ事實上ノ口頭供述カ被控訴人ニ送達シタル書面ノ包有事項ト抵觸セス且被控訴人ノ為メ第一審ノ記録ニ因テ顯ハルヽ攻擊防禦ノ方法及ヒ舉證ノ結果ニシテ第一審裁判所ノ裁判ノ憑據ト為リタルモノニ抵觸セサル限リハ其口頭供述ヲ自認シタルモノト看做サレ又控訴人ヨリ第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辯駁スル為メ申立テタル不適法ナラサル採證ハ既ニ為サレ且其見込ム所ノ結果ヲ得タルモノト看做サル

第四百八十條　從屬控訴ノ場合ニ於テハ出頭

セサル被控訴人ニ對シテハ第四百七十八條ノ規定ヲ準用シ又出頭セサル控訴人ニ對シテハ前條ノ規定ヲ準用ス

第四百八十一條　裁判所書記ハ控訴ノ完結シタル後記録ヲ第一審裁判所ニ還付シ又判決カ發セラレタルトキハ其謄本ヲ之ニ添附ス可シ

第四百八十二條　名稱ノ為メ許ス可カラサル上訴カ起サレタリト雖モ情況ニ從ヒ原告又ハ被告カ控訴ヲ見込シタリトスルヿヲ得且其控訴カ許ス可キモノナルトキハ其控訴ヲ起シタルモノト看做ス

第四百八十三條　控訴提起ノ期間ヲ懈怠シタル原告又ハ被告カ天災若クハ其他避ク可カラサル事變ニ因リ其期間ヲ遵守スルヿヲ妨ケラレタルトキハ其原告又ハ被告ハ非常控訴ヲ為スノ權利アリ

第四百八十四條　非常控訴ヲ起スノ期間ハ十四日トス其期間ハ障碍ノ止ミタル日ヲ以テ始マル

懈怠シタル控訴期間ノ終ヨリ起算シテ一个年ノ滿了シタル後ハ最早非常控訴ヲ許サス

第四百八十五條　非常控訴ヲ起ス為メノ書面ハ控訴狀ノ要件ニ相當スル書面ト共ニ之ヲ差出シ且左ノ諸件ヲ掲クルヿヲ要ス

第一　非常控訴ノ理由タル事實ノ表明

第二 非常控訴ヲ起ス旨ノ陳述

第四百八十六條 非常控訴ノ申立人ハ相手方ノ陳述ニ拘ハラス非常控訴ノ理由タル事實ヲ疏明ス可シ

第四百八十七條 非常控訴ノ許否ニ付テノ訴訟手續ハ控訴ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合スヘシ但或ル爭点ニ付キ辯論ヲ分離シテ為スヿヲ命ス可キ裁判所ノ權利ハ此カ為メニ妨ケラレス

非常控訴ノ許否ニ付テノ裁判及ヒ裁判ニ對スル不服申立ニハ此ニ關シ控訴ニ付キ行ハル可キ成規ヲ適用ス然レ𪜈非常控訴ヲ起シタル原告又ハ被告ハ故障ヲ申立ツルノ權利ナシ

第四百八十八條 非常控訴ノ許否ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノ費用ハ其相手方ノ理由ナキ異議ニ因テ生セサル限リハ申立人ノ負擔ニ歸ス

第二節　上告

第四百八十九條　上告ハ區裁判所及ヒ地方裁判所カ第二審裁判所トシテ發シタル判決又控訴院カ發シタル判決ニ對シ之ヲ爲スヿヲ得

第四百九十條　上告ハ判決カ法律ノ違背ニ起因シ又ハ法律ニ違背シテ發セラレタリトノ事ノミヲ以テ憑據ト爲スヿヲ得

第四百九十一條　左ノ場合ニ於テハ法律ニ違背シタルモノトス

第一　法則カ其法律上ノ成規ニ基ケルト法律タルノカアル慣習ニ基ケルトヲ問ハス之ヲ適用ス可キニ適用セス又ハ之ヲニ適用

ス可カラサルニ適用シタル𪜈
第二　訴訟手續ニ付テノ重要ナル成規ニ乖
戾シタル𪜈

第四百九十二條　上告ハ判事カ左ノ諸件ニ付
キ誤リタリトノ事ヲ以テ憑據ト為ス𠀋ヲ得
ス
第一　判事ノ意見ニ從ヒ適用スル𠀋ヲ得ヘ
キ成規ノ適用
第二　事實ノ判定但其際法律ニ違背シタル
𪜈ハ此限ニ在ラス

第四百九十三條　上告期間ハ一个月トス其期
間ハ判決書ノ送達ヲ以テ始マル
判決書ノ送達前ニ於ケル上告ノ提起ハ無効

タリ

第四百九十四條　上告人ハ受救權ヲ付與セラ
レサル𪜈ハ上告ノ提起前ニ上告金十円ヲ裁
判所書記ニ納ム可シ
判決廢棄ノ場合ニ於テハ上告金ヲ還付ス
左ノ場合ニ於テハ上告金ヲ還付セス
第一　上告ヲ受理セサル𠀋ヲ判決ヲ以テ言
渡シタル𪜈
第二　受理シタル上告ヲ判決ヲ以テ理由ナ
シトシテ却下シタル𪜈
第三　上告人カ上告ヲ取下ケタル𪜈
受救權ヲ付與セラレタル原告又ハ被告ハ前
項ノ場合ニ於テハ上告金ヲ追納スルノ義務

アリ又此場合ニ於テハ第百三十二條ノ規定ヲ準用ス

第四百九十五條　上告ノ提起ハ上告状ヲ大審院ニ差出ニ因テ之ヲ為ス

第四百九十六條　上告状ハ準備書面ニ付テノ普通規定ニ從ヒテ之ヲ作リ且左ノ諸件ヲ掲クルヿヲ要ス

第一　上告ヲ受クル判決ノ表示

第二　其判決ニ對シ上告ヲ起ス旨ノ陳述

第三　判決ニ對スル不服ヲ申立ツル限度ニ付テノ定マリタル陳述及ヒ不服ノ理由殊ニ左ノ事項

イ　法則ヲ確定セラレタル事件ニ適用セス又ハ不正ニ適用シタルニ因リ法律ニ違背シタリトノ事ヲ以テ不服ノ憑據トシタルトキハ其法律ノ表示

ロ　訴訟手續ニ付テノ重要ナル成規ニ乖戾シタルニ因リ法律ニ違背シタルヿヲ以テ不服ノ憑據トシタルトキハ其成規及ヒ事實ノ表示

ハ　法律ニ違背シテ事實カ確定セラレ遺脱セラレ又ハ提出シタリト看做サレタルヿヲ以テ不服ノ憑據トスルトキハ其事實ノ表示

第四　第三號ロ及ヒハノ場合ニ於テハ必要ナル挙證方法ノ表示

第五　定マリタル申立

然レ氏右第四號ニ掲ケタル要件ノ欠缺ハ上告提起ノ効力ニ影響ヲ及ホサス

第四百九十七條　上告状ニハ上告金ノ預リ證書又ハ受救権付與ノ證明書ヲ添フ可シ若シ之ヲ添ヘサル片ハ上告ノ提起ヲ為サヽルモノト看做ス

第四百九十八條　大審院ハ上告人ヲ呼出シタル上第五百三條ノ規定ヲ準用シテ報告判事ノ演述ヲ以テ口頭ノ準備辯論ヲ始メ其辯論ニ基キ上告ノ許否ニ付キ判決ヲ以テ裁判ス

上告カ受理セラル可キモノナル片ハ其受理スル丁ヲ言渡ス可シ

上告カ許サレサルモノナル片[illegible]又ハ其法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起サレサル片又ハ第四百九十條ノ規定ニ依ラサル片ハ之ヲ受理ス可カラストシテ棄却ス可シ

上告人カ準備辯論ノ期日ニ出頭セサル片ハ上告ハ取下ケラレタルモノト看做サル

丙紀

五月十七日配付

民事訴訟法草案

第廿一回

第四百九十九條　上告カ受理セラレタルトキハ上告状ノ副本ハ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キノ旨ヲ催告シテ之ヲ被上告人ニ送達ス

第五百條　答辯書ハ準備書面ニ付テノ普通規定ニ從ヒ之ヲ作リ且定マリタル申立ヲ掲クルヿヲ要ス

第五百一條　被上告人ハ上告ニ從屬スルヿヲ得

從屬ハ答辯書ニ之ヲ陳述スルヿヲ要ス其從屬ハ若シ書面ニ第四百九十六條第三號ノ規定ニ依レル不服ヲ掲ケス又ハ申立ヲ掲ケサルトキハ法律上ノ効力ヲ有セス

其他被控訴人ノ控訴ニ從屬スルヿニ付テノ規定ヲ準用ス

第五百二條　答辯書ニ從屬ノ陳述ヲ掲ケタル𪜈ハ其副本ヲ上告人ニ送達ス可シ上告人ハ七日ノ期間内ニ辯駁書ヲ差出スヿヲ得

第五百三條　書面交換ノ終リタル後裁判長ハ報告判事ヲ任ス報告判事ハ其記錄ニ基キ裁判ノ為メ要用トスル限リハ爭訟ノ事實關係及ヒ權利關係ノ表明書ヲ七日ノ期間内ニ作ル可シ但法律ニ係ル判定ニ立入ルヿヲ得ス

其後ニ至リ口頭辯論ノ期日ヲ定ム

第五百四條　其他ノ訴訟手續ニハ下ノ數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ第二百四

十一條ヲ除キ地方裁判所ノ第一審訴訟手續ノ成規ヲ準用ス

第五百五條　口頭辯論ハ報告判事カ其表明書ニ依リ演述スルヿヲ以テ始マル

原告被告ハ補充及ヒ更正ヲ為シ之ニ次キ其申立ノ理由ヲ辯明スルノ權利ヲ有ス

第五百六條　大審院ハ上告書ニ於テ申立テラレ又ハ從屬ニ因リ答辯書ニ於テ申立テラレタル不服ノミヲ調査ス

第五百七條　大審院ハ裁判ヲ為スニ付キ控訴裁判所カ其裁判ノ憑據トシタル事實ニ羈束セラル此事實ノ外ハ第四百九十六條第三號ロ及ヒハニ表示シタル事實ノミヲ斟酌スル

丁ヲ得

採證カ必要ト為ル片ハ大審院ハ之ヲ命ス可シ其採證ノ完結ハ大審院其意見ヲ以テ自ラ之ヲ為シ又ハ之ヲ他ノ裁判所ニ委任スル丁ヲ得

第五百八條　上告カ理由アリトセラル、片ハ不服ノ申立ヲ受ケタル判決ヲ廢棄ス可シ廢棄ハ訴訟手續ニ付テノ重要ナル成規ニ戾スル為メニ為サル、片ハ其戾スル限リハ其訴訟手續ヲモ亦廢棄ス可シ

第五百九條　判決廢棄ノ場合ニ於テハ次條ノ規定ヲ留保シテ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ為サシムル為メ事件ヲ前控訴裁判所ニ差戾シ又ハ

之ヲ他ノ同等控訴裁判所ニ移送ス可シ控訴裁判所ハ辯論及ヒ裁判ヲ為ス丁ヲ要ス新ナル裁判所ハ新ナル口頭辯論ニ基キ之ヲ為ス原告被告ハ廢棄セラレタル判決ヲ發セシ前ノ口頭辯論ニ方リ提出スル丁ヲ得ヘカリシ事項ヲ新ナル口頭辯論ニ際シ提出スルノ權利アリ

控訴裁判所ハ大審院ノ為シタル法律ニ係ル判定ニシテ判決廢棄ノ基本トシタルモノヲ以テ標準ト認メ且之ヲ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト為スノ義務アリ

第五百十條　大審院ハ左ノ場合ニ於テ判決ヲ廢棄シ事件其モノニ付キ裁判ス可シ